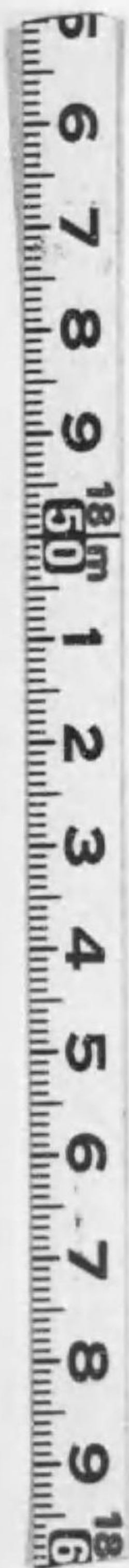


特116

697



始



特116

697

玉井

景清

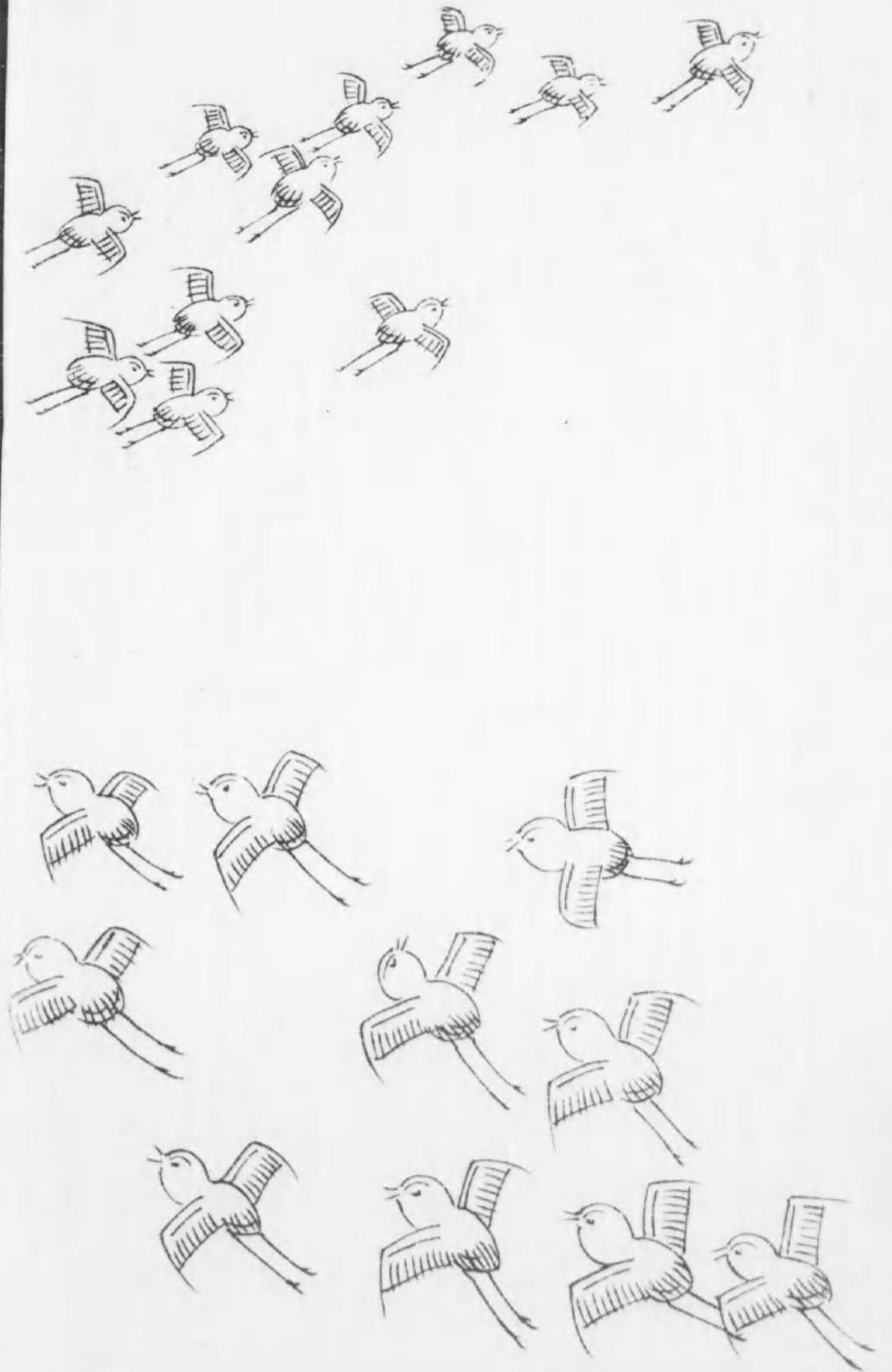
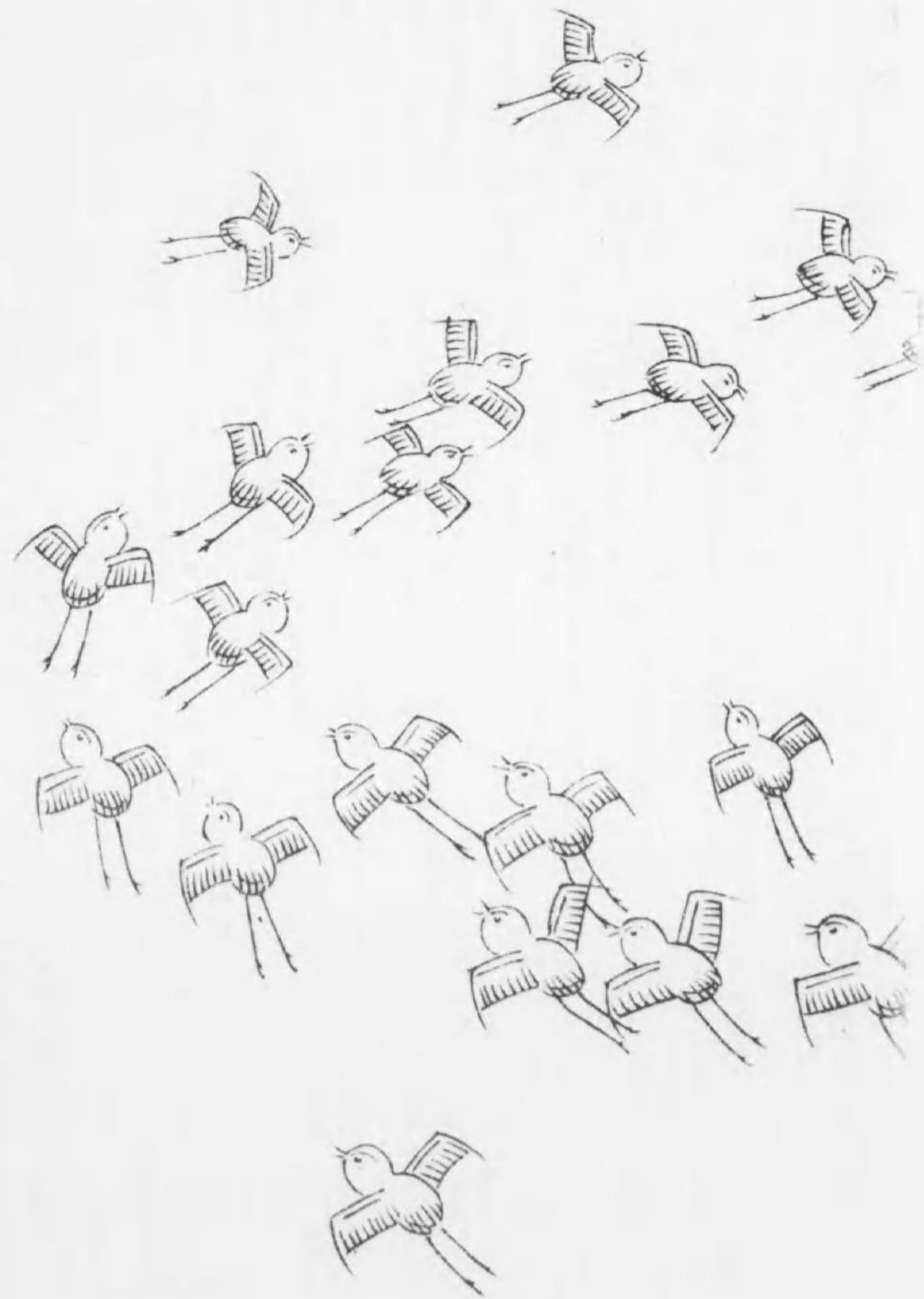
杜若

二人静

安達原

觀世流改訂稿本

内九



觀之
清之
長世

43116
69

玉井

解題

彦火々出見尊、兄火闌降尊の釣針を魚に取られ、之を取り返さんと目無籠を舟として海神の宮に到り、龍女豊玉姫と契りて此に三年を過したりといふ神話を脚色せり。日本書紀の記録を基とし、これに古事記の同じ項を配して作れりといふ見ゆ。常型の神事能に比べて異色あると、材を書紀に求めたるは、創作の新しいきを證するものといふべからん。能本作者註文及び二百十番謡目録に觀世小次郎の作と記したるも古典に據るべきものなし、又古く演奏の記録を見ず。

謡ひ方梗概

前半は賀茂に類して更に重く、位有り、後半は春日龍神に似て然も靜に確とあるべし。通じて嚴肅を旨とすべし。

シテ

前は女れども脇能物なれば優しき中にも健に確りとしたる處有るべく、賀茂よりも品位更に高き大正宣しとす。此要領にて眞之一聲を謡ひ、サシよりさらりめに、下歌にて少しく緩め、上歌は暢び、

朝かに謡ふべし。ワキとの問答、掛合は心持なごを附けず、概ね確りめにして慎しやかに承け應ふ。「いかに申上候」の詞は落着き有りて前よりも位聊かさりとあるべし。サシはさらりと、「父母の神」云々は確りめに扱ふ。クセの上端は位を大きく、「御心安く思し召せ」はさらりと出で以下を確り謡ひ、地に渡す前を締めて止後は大龍の立物も翼く老龍なれば普通の龍神とは趣を異にし、位靜にごつしうと扱ふが宜し。出の「まうこの君の」は稍聲を抑へ靜に強々と大きく、「わたづみの宮主」も亦位壯重に謡ふ。

ツレ

前は常と變りなし。獨り謡ふ處は聲調を上目に取りてさらりと扱ふ。後は確りと乗りて勢好かるべし。

ワキ

天孫なればさらりと扱ふ中にも充分品位を保ちて確りと健なるを宜しとす。此心組にてサシを謡ひ、詞になりて清くさらりとなり、「わたづみの」云々を確りと、上歌にて別に位を定めて矢張り確りとはあれど運び好く、「さてもわれ」以下前と更へてはつきりとあるべし。シテ出で、よりは位を譲れど、輕々しくは扱はず、詞、掛合角立たぬを要す。

地

「たがひに重枝の」は前の氣を承けてさらりと出、「木綿四手の」と少しく鎮め、以下又戻して謡ふ。クリは大きく確りとあるべく、サシ以下、さらりと扱ふが宜し。クセは稍確りと謡ひ、「大鰐に乗じ」云々は

大正宣
13. 9. 25
内交

静にごつしりと扱ふ。後は「おのく玉を」を乗つてさらりと、シテ出で、よりは後も地は概ねさらりとしたる味はひにて乗り、「姿は老龍の」はシテを受けて緩めて出、位を大きく、ごつしりと、引き締めて誦ひ納む。

辭解

天地開け 天地開 關の意 **天神七代** 日本書紀に「天地の開くる始、國土の浮び漂へる事、譬へば遊魚の如し。便ち神となる、國常立(こくにんたて)尊と申す。次に國狹植(くにのぼし)尊、次に豊斟(とよしむ)尊、凡て三柱の神ます。天の道獨成る。此故に此純男をなせり。次に神います。埴土煮(はにぢ)尊、沙土煮(さぢ)尊。次に神います。大戸之道(おほのちのち)尊、大古邊(おほこへ)尊、次に神います。面足(おもそ)尊、惶根(おそ)尊。次に神います。伊弉諾(いさだ)尊、伊弉册(いさだ)尊。凡て八柱の神ます。天地の道相交りて成る。此故に此男女をなせり。國常立尊より伊弉諾尊、伊弉册尊まで是を神世七代といふなり」(以上譯文)

地神四代 天照大神(あまてらす)尊。正哉吾勝勝速日天忍穗耳(ただよみかみ)尊。火遠理(ひのり)尊。亦の名、天津日高日子穗穗手見(あまひたかひこほほてみ)尊。穗手見(ほてみ)尊。火火出見(ひひでみ)尊。このかみ 古語 兄の **火閑降の命** 彦火火出見尊は山野の獵を營み給ひ、業を易へ給ひて慣れぬ事を試み給ひし事、古事記及び日本書紀に見ゆ。かりそめながら 釣針を借るにかゝる。か 劍をくづし 此弟尊佩かせ給ふ十柄の劔を破り五百の鈎を作り箕に盛りて奉りしも兄尊聞き入れ給はざりしなり。唯もこの鈎をはたる 書紀の文を引く。鈎は釣針、はたるとは責め求むること。わたとづみ 海を云ふ。底を其處に通はせ潮を鹽土翁に云ひ掛く。鹽土の翁 古事記には「しほつちの神」、日本書紀には「しほづのをち」とあり。目無籠 目の

までこまかく編みたる籠。鹽土の翁が造り與へし目無籠の舟に乗りて海神の宮に到りしこと記紀に出づ。猛き心 籠(かたま)の竹の音を受けて猛き心(まじこころ)に續く。直なるも竹の縁語。わたづみの都 海神の宮居。わたづみは渡つ海の意にて「つ」を清み。瑠璃の瓦 瑠璃は七寶の一。それにて造りし美しき瓦。阜門 王侯の門をいふ。又高門の字をも當てたり。記紀には單に門とのみ記せり。玉の井 美しき井戸。湯津の桂の樹 繁りたる桂の樹。事の由 子

手ずさみ 手にてする慰。掬ぶ 汲む。老いせぬ門に 和漢朗詠集保胤の詩「長生殿裏春秋富。不老門前久方の」天に冠す。天にもますや 雲らざる日月天に坐(ま)して老の繩の長きに掛く。月の桂 月中の桂によそへていふ。曇りなき枝を連れて 姉妹諸共の意。同夕なる、 姉妹の馴れ親しむを玉の井の見なれしに。けだかき 品格。白露の 知らぬと云ふを白に掛と順次語。あさま 明らか。なべてならざる 並々な。みやびやか 品好く美。天孫 天神の後裔。出づ。天の御神 天照大神と解するは如何あらん。御孫の尊を 御(み)、尊(み)、ま、見(み)、龍宮、わたづみの宮 龍宮即ちわたづみの宮の意。されど二者實は同じからず、一は國史に基く。せうこ

せ人の音便。本來は兄、姉の義。つ、まし 恥か。御神 彦火火出見尊を指す。木綿四手 打ち解けて物云ふを木手はゆふにて作りし布又は紙の幣、其木綿四手の歌といふ音を受け神に續けたり。大ぬさの 伊勢物語の歌「大ぬさの引く手あまたになりぬればる榊に麻と紙とを懸けたるものなり。引く手あまたの心と、うちつけ 唐。かぞいろ 古語。雉、堞 雲紀に海神の宮の様を書ける原文なり。雉は高き垣、堞はさ、や。雲の八重席 書紀に「八重だゝみ(席)かなる低き垣、それらが粹然として高樓の美しく輝けるなり。雲の八重席 書紀に「八重だゝみ(席)まつる」云々。雲は。いづきかしのづき 大切に仕へ。釣針 ことにて「チヨウシン」と讀むは後世の誤傳に作者の修飾の辭。

いづきかしのづき 大切に仕へ。釣針 ことにて「チヨウシン」と讀むは後世の誤傳に作者の修飾の辭。

いづきかしのづき 大切に仕へ。釣針 ことにて「チヨウシン」と讀むは後世の誤傳に作者の修飾の辭。

いづきかしのづき 大切に仕へ。釣針 ことにて「チヨウシン」と讀むは後世の誤傳に作者の修飾の辭。

いづきかしのづき 大切に仕へ。釣針 ことにて「チヨウシン」と讀むは後世の誤傳に作者の修飾の辭。

潮満潮涸の二つの瓊龍宮の寶珠。潮の満干を自在になし得る珠。海神此二珠 任せて國も久

方の思に任せて國も久しく榮ゆ 外祖豊玉姫を尊にめあはせ、海神 豊姫豊玉姫の略 たゞならぬ姿

懷妊の様子の わたづみの宮主海神 はやて急に起る烈風 曇らぬ御影玉を受けて尊の美しき尊體をいふ 金銀兜裏銀

のの 小ま まうこの君客人の尊稱。尊をさす 桂の黛黛は書き眉。其黛の美しきを賞へて云へり。桂は 雪を

廻らす舞を歎賞していへる詞。張衡觀舞賦に「袖如回雪」月といひ、花といひ更に雪といひて辭を飾る。 鹿背杖鐘木形に 左右に返す袂舞の

ふ。五丈の鰐古事記には一尋の鰐、書紀には八尋の鰐とあるをこゝには五丈の鰐と更へたり。 龍王龍宮

装束附

前シテ(豊玉姫) 面増、鬘、鬘帶、襟白赤又は白二、着附摺箔、唐織著流、扇(右に持ち)、水桶(左に持つ)

後シテ(海神) 面鼻瘤惡尉又は大惡尉、白頭、輪冠銀の大龍を戴く、白地金緞鉢卷、襟花色、着附無色段

前ツレ(玉依姫) 厚板、半切、白地狩衣、紋附腰帶、神扇(指す)、鹿背杖(突く)、釣針(左に持つ)。

子方(天女二人) 鬘、鬘帶、黑垂、天冠、襟赤、着附摺箔、唐織着流、水桶。

ワキ(彦火々出見尊) 唐冠、赤地金入鉢卷、着附厚板、白大口、袷狩衣、縫紋腰帶、扇。

脇能 半閑口

玉井

無季

前ツレ 玉依姫 後ツレ 天女
前シテ 豊玉姫 後シテ 海神
ワキ 彦火々出見尊

ワキサシ(品位ヲ保チ確カリ)
ツヨク(拍子不合)

天地開け始まりしより天神天
地神代に至り。父々出見の尊より我

事あり。さても兄々南降の命の釣

針や。かりそめあら海邊よ釣を垂れ

しよ。彼の釣針や魚よさらぬ。此由を

兄尊よ申せらむ。唯もこの針を返せと

釣針はたのトモ

宣^{ノタモオ}向^{ケン}劍^{ケン}やぐら^ノ針^ノは作^ツて反^シま^スの
 し^トも^ト猶^トも^トの^ト釣^ナ針^ヲを^ト青^キの^トな^リて^ト海^ノ中^ニ
 よ^クり^テ。彼^ノの^ト釣^ナ針^ヲを^ト尋^ネん^トと思^ヒ立^テ
かん上(確カリ)ち^テの^トあ^タら^ミの^トそ^ノも^ト知^ラぬ
上教(定ナク運ビテ)鹽^シ土^ノの^ト翁^ノの^ト教^ヲを^ト従^ヒて^ト目^ヲ無^ク龍^ノ
(拍子合)猛^タき^心ま^ぐあ^ル道^ヲを^ト行^ク如^クま^ぐ
打切あ^ル道^ヲを^ト行^ク如^ク。波^ノ踏^ミ遙^ク隔^テ来^テ

こ^ノぞ^ノ名^ヲお^ノ海^ノの^ト都^ヲと^ト知^ラぬ^ト水^も
打切あ^ク。廣^キ真^砂は^ト著^キは^トり^ト廣^キ
シツメル)真^砂よ^クは^トり^ト儲^もあ^レ鹽^土の^ト
何(清クハツキリ)翁^ノが^ト教^ヲを^ト従^ヒ。あ^タら^ミの^ト都^ノの^トり^ぬ。
 こ^ノの^ト溜^池の^ト瓦^ヲを^ト敷^キけ^ト鼻^門あり^ト。
 白^前の^ト井^{あり}。こ^ノの^ト井^のあり^トは^トま
 銀^色輝^きせ^の常^{あり}ま^ぐ。又^ト湯^津の^ト

三井

三井

桂カヅラの樹あり。木のモト下はまをち寄りの志を

らく事の由ぢも窺ウカガを（侍者ヨク）やと思ひい

はかりあま（品位高ク優ニ確カリナシ）齡ヨシを延ぶ（シテヨリクニ）明暮アカツクニの永ウラき

日ヒ日の光あ（位ヲ度シテ）いとあむ業ウヂも手

ま（拍子不合）き（シテサ上）み（朗カニサラリ）よ。掬（位ヲ度シテ）よも清（トキ）き。水（トキ）あらん

濁（トキ）あま（イヅミ）ま（イヅミ）の（イヅミ）水（イヅミ）の泉（イヅミ）まで。老（ヨシ）いせ（ヨシ）ぬ（ヨシ）齡（ヨシ）を

汲（トキ）みて（トキ）知（トキ）る。薬（トキ）の水（トキ）の故（トキ）ありや。老（トキ）い

せぬ（トキ）門（トキ）よ（トキ）出（トキ）で（トキ）の（トキ）や。日（トキ）日（トキ）曇（トキ）らぬ（トキ）久（トキ）

方（トキ）の天（トキ）よ（トキ）も（トキ）ま（トキ）ま（トキ）や（トキ）此（トキ）國（トキ）の行（トキ）く（トキ）末（トキ）遠（トキ）き。

ま（トキ）ま（トキ）ひ（トキ）あ（トキ）か（トキ）（拍子合）
く（トキ）り（トキ）返（トキ）ま（トキ）玉（トキ）の釣（トキ）籠（トキ）の

掛（トキ）繩（トキ）の（トキ）長（トキ）き（トキ）命（トキ）を汲（トキ）みて（トキ）知（トキ）る。長（トキ）き（トキ）

命（トキ）を汲（トキ）みて（トキ）知（トキ）る。心（トキ）の底（トキ）も曇（トキ）あ（トキ）ま（トキ）目（トキ）

の桂（トキ）の光（トキ）深（トキ）み（トキ）枝（トキ）や（トキ）連（トキ）ね（トキ）て（トキ）も（トキ）ら（トキ）も（トキ）よ。

朝（トキ）あ（トキ）る（トキ）玉（トキ）の井（トキ）の深（トキ）き（トキ）契（トキ）ハ（トキ）頼（トキ）も

小謡

殊ツルよニ文フやビびヤのハあリつ。常ト人トをシて見
奉ルのハ名ヲあのつ。あまる。まま 今ハ

早ハ何レ（待著ヨク）

何レをラ包ムむ。あののハ天孫地神四代

大ホ女メ出デ見ミのハ尊ニとル我ガ事チあり

ツレ（候ニサラリ）

あらありがたや天のハ神ノのハ孫ノ尊ニ

ままのハあたり。見奉る。ぞ。不思議。ある

シテ何レ（候マシヤカニ）

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

早ハ何レ（候カニ）

のハ故ヤらこのハ不審のハ理。あの

釣ノ針ヲ魚ノをハつ。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

カレ上（流ニナク）

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

シテ何レ（静ニ）

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

早ハ何レ（候カニ）

あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。あまる。

早ハ何レ（候カニ）

早ハ何レ（候カニ）

小謡

シンテ(閑雅ニ) 豊玉姫ツレ(サラリ) ありませおとの玉依姫
 ヨク地上(優ニサラリ) たかひよ連枝の名のうしてつま
(拍子合) あぐら神のみやびやうあるはや
 打ち解けて本綿四手の神(前戻シテ) をぞ靡
 く大幣のゆく手あまたの心あましく
 手あまたの心あましく(シツメテ) 申しよべる。
 うちうけある事あはれもやごと

● 獨吟サシクセ

カゾイロ 父母よ達を奉り。彼の釣針をも尋
 ぬべー。心安く思ーめさるる入
 早(清クスラリ) さらぎやごと。幸ひ申し。宮中へ入り
地クリ上カクジナクム べー。天の神の孫。
ツヨク わたづめの都にまゝり給ふ事ありが
(拍子不合) たかりける。は影あか
地(サラリ) 雉塔 軒心 預り。吉臺 宇や玲瓏き。
タガキヒメガキト

雲の八重席シテ中蔭を鋪シテ中き尊シテ中を請シテ中り
 れ奉シテ中り 父母の神シテ中よりシテ中まシテ中かシテ中づシテ中き
 臨幸の意趣シテ中を語シテ中り給シテ中ふシテ中 打切シテ中われシテ中兄
 の釣針シテ中をシテ中かりシテ中そシテ中あシテ中らシテ中浪シテ中向シテ中ゆシテ中くシテ中魚
 にとらシテ中れてシテ中あシテ中まシテ中きシテ中由シテ中をシテ中歎シテ中きシテ中給シテ中ふシテ中とシテ中其
 針シテ中はシテ中あシテ中らシテ中まシテ中りシテ中かシテ中らシテ中るシテ中かシテ中まシテ中ふシテ中やシテ中らシテ中う
 とシテ中やシテ中いたシテ中めシテ中なシテ中まシテ中ぐシテ中よシテ中たシテ中らシテ中わシテ中かシテ中らシテ中のシテ中らシテ中

ちシテ中らシテ中んシテ中とシテ中語シテ中りシテ中給シテ中ふシテ中バシテ中かシテ中ぞシテ中のシテ中神シテ中はシテ中心シテ中安シテ中く
 思シテ中へシテ中めシテ中せシテ中まシテ中らシテ中釣シテ中針シテ中をシテ中尋シテ中ねシテ中つシテ中所シテ中國
 又シテ中くシテ中申シテ中まシテ中へシテ中 猶シテ中兄シテ中のシテ中念シテ中あシテ中らシテ中ぶ
 潮満潮固シテ中のシテ中らシテ中のシテ中價シテ中をシテ中首シテ中すシテ中よシテ中奉シテ中り
 ちシテ中をシテ中心シテ中よシテ中任シテ中せシテ中てシテ中國シテ中もシテ中久シテ中方シテ中のシテ中天シテ中より
 降シテ中るシテ中神シテ中のシテ中外シテ中祖シテ中とシテ中あシテ中りシテ中てシテ中豊シテ中姫シテ中も
 だシテ中ちシテ中らシテ中ぬシテ中姿シテ中有シテ中明シテ中のシテ中月シテ中日シテ中程シテ中あシテ中くシテ中三

年を送り給へり。かくて三年あり

ぬれ。我が國よ帰りのほろへ。海路の

志るべらちあらん。心安く思めせ。

あたらぬみの宮主もあひて海中の

乗物様ごあり。大鯨よ乗し風

風を吹かせ。陸地よ送りつけ申さん。

其程の待たせおさしませ。

來序中入

後ツレエ上

出端
(拍子不台)

光ちる。潮満瓊のおのづから曇らぬ

影仰ぐあり。おのづから瓊や捧げ

つ。おのづから瓊や捧げ。豊姫玉

依二人の姫宮。金銀器裏よ瓊を

供へ尊よさげ。奉り。彼の釣針や。待

ち給よ。あたらぬみの宮主。持来せよ

ありとの君の命よ随ひ。あたらぬみの

大應
打上
後ツレエ上
(位靜ニドツシリトキク)

●獨吟

宮主 釣針を尋ねて。天孫の御前よ。
甲 打込返 潮満潮満 潮満潮満 潮満潮満 潮満潮満
打込返 潮満潮満 潮満潮満 潮満潮満 潮満潮満
 添へさげ申し。舞樂を奏し。豊姫
 玉依。袖を返して。舞ひ給ひ。いら
 れも妙ある舞の袖。いられも妙ある
 舞の袖。玉のあんざ。桂の黛月も

(拍子合ノル) シニ
 打込返
 ×此舞働ハ他ト地
 趣異リテ静ナル
 モノナリ

地拍子
 又拍子扱
 拍子扱

照り添ひ花の姿。雲を廻らきて。袂あか
 ち。あたづみの宮主。あたづみの宮主
 姿ハ老龍の雲よ。幡り。唐荷杖よも
 かり。左なよ返ま。袂も華やうよ。足
 踏ハとまりくと。拍子を揃へて時移
 れ。尊の座や。まら給ひ。帰り給へ
 袂よまがり。あたづみの乗物を奉ら

トキ

五文の鯨よ乗せ奉り。人の
 娘よ寶を持たせ龍王を來る。浪を
 拂ひ潮や蹴立て。遙よ送りつけ奉り。
 遙よ送りつけ奉り。又龍宮
 まで送りける。

景清

解題 古く別名を盲景清といふ。悪七兵衛景清の女人丸、日向の宮崎に盲目の乞食となれる父を訪ふを表とし、老衰淪落の景清が勇壯なりし昔を物語ることを作れり。能本作者註文及び二百十番謡目録に世阿彌の作とあり。飯尾宅御成記に載せたる寛正七年二月廿五日觀世又三郎が演せし番組の中に此曲あり。

能之小書

小返といふ小書あり。

謡ひ方梗概

九番習中の重きもの、特に位の取り難く、場面の變化の表し難き曲として全く他に比ぶべきものなし。習ふにも謡ふにも其心を以てせざれば、終に此曲の精神を發揮すること能はざるべし。

シテ

平家亡びて後山野に身を潛めて再舉を企て居たる平家重代の武人の末路盲目の乞食となれるを作りしが此曲なれば、シテの位より眞に難しといふべきなり。或は衰へたる中に昔の面影を存し、或は心勇

ならんとして身及ばず、親子の情に動かされては弱く、昔を語つては強き所、一章一句も忽にすべからず。「松門」の出は昔の勇者が老衰淪落して身を歎する沈痛の情緒を表す可く、聲を内に取り調子を抑へ、心に強みをもちて節を弱に扱ひ、極めてしんみりと謡ひ出す。さればとて低きに過ぎ、遲きに過ぐべからず。抑揚變化多き節の移りに泥む事無く、辭々悉く心あるべし。「秋さぬと」以下の詞、抑へて同じく沈痛なるべく、從者との掛合は餘り重くなるを好まず、「げにさやうの人をば」云々は充分の心持を要し、「さもあさましき」云々は内に取つて寂しき意を浮ぶる間にも滯らぬやう心すべし。「不思議やな」以下の獨言は感慨胸に迫るところ、句々心持あり。「われ一年」にて少し氣を起し、「馴れぬ親子」にて又歎かず。「かしまし」はうるさしと思ふ心、調子を抑へたる中にも稍強みに氣合を以て謡ひかけ「さなきだに」と氣を抜き、以下それごとく心持して謡ふ。「萬事は皆」云々より詞に少し運びを持ち、「悪七兵衛景清なんぞ」とは極確りと云ひ、「呼ば」此方が「の一句氣合をかけ、「其上……」と氣を乗せて稍さらりと地に渡す。「處に住みながら」は深く心持せず。「目こそ聞けれど」は抑へたる調子を強みを含みたるまゝ少し緩めて上端の如き扱ひに稍さらりと出づ。ワキとの掛合は深く位取らず稍さらりめに輕き方、「今までは」云々よりは心の少し弱々となりし味はひなり。曲進みて語となりては戰

場に暇無かりし思ひ出の昔語、今の景清の身にとりては心の引き立つ絶頂なれば言々其節を寫すに力むべし。されども何處までも老衰と盲目との心を失はず、弱き中にも寂しく、引き立ちたる中にも底意沈みたるべし。音に力を持ち、調子を抑へて内にとり、句の間を充分にとつて手強く聞きこたへあらしむる事肝要なり。「景清心に思ふやう」にて氣を更へ、確りと稍下にとる。句毎に位少し進み、「あますまじとて」は氣合を掛けて地に渡し「さもうしや方々よ」は少し得意の心なるべし。

ツレ

次節は浮き調子にならぬやう、しつとりとして且さらりとあるべし。「これは鎌倉云々以下凡て素直はさらりと常のツレの位。「のうみづからこそ」は心急ぎて云ふところ、氣合を持ちて稍上調子にさらりと出で、「恨めしや遙々のより少し静めてクドキの調子に扱ふ。」

トモ

ツレとの同吟の所は凡てツレと同じ心なり。詞はそれ／＼の場合に適ふやうに心すべきも概ねさらりと位を輕きにとる。

ワキ

トモとの掛合、初の程はさりげなく扱ふも「のう其盲目なる」はトモの詞へかけて確りと出、「あら不化あり。「のうく景清の」以下二句、いづれも聲を上にし確かりと呼び立つる心なれど前の句よりも後の句を特に強めにかゝつて扱ふ。次のシテとの掛合二箇所、凡てシテを助けて調子扱ひのせぬやう心すべし。

地

初の上歌は調子を抑へて物寂しくしつとり附け、「有様を」の打切前を充分誦ひ、静め、「われたに」より又寂しく前の調子に戻す、「聲をば聞け」と云々はしつとりと時に時の感慨を表すべし。「日向とは」の上歌は聲を抑へずに稍さらりと引き立て、誦ひ、「悪心は」のクリ入に氣をかけ、「思へども」と氣を抜いて「又」と強め、「腹立ちや」を軽く運ぶ。「處に住みながら」とシテを受けて出、さらりと運んで誦ふ。「憎まれ」「腹悪しく」共に心持あり。「目こそ聞けれ」も同じくシテを受けて出、「山は松風」より氣をかけ、「すは雪よ」と手強く、「見ぬ花の」と稍静に大きく「夢の惜しさよ」と引き締め、「さて又」より氣を更へて氣合よろしく誦ひ進み、句々心持ありて「さすやらん」と少し静め、「さすがに」より静に位を緩めて誦ふ。「あはれげに」云々は稍さらりと、「一門の」上歌、確かりと扱ふ。「景清これを見て」よりは確かり強みを本に受け、返しより氣

を乗せてかゝつて誦ふ。「さもうしや」以下句々手強く、それ／＼心持あつて氣合宜しく誦ひ行き、「左右へのきにける」と静めて高調に達したる思ひ出の現在に返らんとする味はひを表し、「昔忘れぬ」と全く別に出で、寂しくしつぼりと誦ひ納む。

注意すべき誦ひ方

シテの詞「唯一空のみ」は節ある處の如き心にて「唯」と抑へ、「一空」と上に附けて扱ふ。其他節の所には全篇に互り注意すべき所甚多し。

辭解

消えぬ便も

流され人となりたる景清の身を露に喩へて云ふ。露はまだ消えざる由傳へ聞きたるも唯風の便なれば、其露の身の如何になりしか心許無し之意。景清の上を

思ひ詫びたるを露の縁にて綴れり。龜が江が谷

扇か谷より山の内へ越ゆる坂路。龜が谷(ヤツ)なるを誦曲には龜が江が谷と作れり。

悪七兵衛景清 通稱は上總七郎兵衛、伯父大日坊を刺したるにより世に悪七兵衛と呼ばる。平家重代の侍にて武名殊に著しく、平家物語中

到る處に其名見ゆ。屋島の浦に美穂の谷と戦ひて源氏を驚かしたること此曲の語の骨子となれり。敗戦毎に巧に通れ、他日又必ず陣頭に立ちたれば生き上手の名を誦はれて屢々源氏を恐れしめたり。壇の浦の合戦にも巧に落ちのびたる事諸本に見えたるが、其晩年の記録は一致せず。平家物語長門本に「六年(建久)三月十三日大佛供養あり。平家の侍上總惡七兵衛景清、鎌倉殿へ降人に参りたりければ和田左衛門尉義盛に預けらる。昔平家に候ひしやうに少しも口へらず、和田左衛門に所をも置かず、一座をせめて盃先に取り、或は椽の側に馬引き寄せ乗りたりなどしてありければ、もて扱ひて他人に預け給へど申しければ、常陸國住人八田左衛門の尉知家に預けらる。」又「上總惡七兵衛景清は降人に参りたりけるが、大佛供養の日をかぞへて建久七年三月七日にありけるに、湯水を止めて終に死にけり」とありて、絶食して自殺したるものと見ゆれども、同じ書の建久七年十月七日の法性寺の戦の條にも「越中次郎兵衛盛次、上總惡七兵衛景清も例の生き上手なれば皆落ちにけり」とありて同書中の記事にさへ矛盾あり。又南都本には法性寺の戦に落ち延びたることを記したる末に「景清は其年の冬鎌倉にて生捕られて宇都宮に預けられけり」と見えたれば、他にも此曲に作られたる如く、日向に流されぬと傳へし書もあるなるべし。大佛供養の日頼朝を襲ひし事は誦曲大佛供養に作られたれ。宮崎 日向、平家物語に依れば是は平家の侍薩摩中務丞宗助(宗資とも)にて景清にあらず大佛供養辭解参照。

の國宮崎郡にあり。思寢 物を思ひつ。片しく 片方の袂を下に敷く意。後に「袂かな」といへ。草の枕 野に臥して草を枕とせし意。露を添へ 秋の日敷添ひて露の置きまさと、さなきだ。行くへを遠江 行くに起りし語。旅寢。露を添へ 秋の日敷添ひて露の置きまさと、さなきだ。行くへを遠江 行くに起りし語。志す方の旅路。それを誰に問はんといひかけて遠江につゞく。三河 身を音を受く。八橋 伊勢物語に「水ゆく川の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるなり」と記せる詞を借り蜘蛛の音を受けて雲居に續けたり。雲居の都 都松門 張籍の詩に「獨閉雙峰老。松門閉。雨漚。」などある意。「獨閉ちて」とは人假寢の夢に 假寢は假そめに寝ること。千載集の歌に「草枕假ねの夢に幾度の訪ひ來らざるをいへり。假寢の夢に 假寢は假そめに寝ること。千載集の歌に「草枕假ねの夢に幾度の假ねの夢に見馴れんものぞとなり。忙は 清光を見ざれば 盲目にして親しく日月の光を見ざしくて心落ち附かぬ旅を叙せるなり。我だに憂しと 自分にさへ 古りて 古くなめづらに 何事をもなさずして。衣寒暖に 夏冬の候に随つて衣を更へる事も無けれ 染むべき袖の 世を背く身ならば出家して衣を墨染にすべきに、さも無く。我だに憂しと 自分にさへ 古りて 古くなめづらに 珍らし ことじき 軒端 少し立ちのく意 秋來ぬと 古今集に「秋來ぬと目にはにぞ驚かれぬる。盲目なる心にて此歌を引き、風の音信と續けたり。いつち 處 三界は所なし 三界は佛教にて凡夫の生死往來するし語。華嚴經に「三界所有唯是一心」。三界といふも唯心にあるものにして所ある 世界を欲界、色界、無色界の三に分ちに非ず。觀すれば凡て是一空の身に過ぎずとなり。華嚴經に「三界若空花」。言とはん 物を問そゝるに 何故と 馴れぬ親子 なじみの なかく 却つ 親の絆 親子の情の斷ち難き 下もなく 馴れぬ親子 なじみの なかく 却つ 親の絆 親子の情の斷ち難き 下

向 尊き處より卑き處へ行くこと。都より田舎に行く類。言語道斷 言語にて云はしむ 目耳などの其 髪をおろし 僧形に。勾當 檢校の次位。名をつき 原「名をつけ」とありしを「き」かしまし 或は此仕儀 此有。千行の悲涙袂を朽たし 菅家後集に「離家三四月。落涙百千。あだし身 假の 打ち覺めて 悟。日向こは 我名の日向勾當を云ひかけ、日向の辭を割りて次句を起す。向ひたる名 現在に向ひ合ひたる今の名の意。今向へればかく 力なく捨てし梓弓 力盡きてせん方無く 惡心 惡七兵衛の惡の字を以てい 御扶持ある方々 常に扶持せらるる人々 偏に盲の杖を失ふに似たる 陳同甫集に「惘然 若盲者失杖」。片輪 不具 腹惡しく 根性の正 由なき 條理の立 目こそ聞けれど 言の中知る程心は働くなり。山は松風、すは雪よ 盲目ながら感ずること敏なるを云へり。山に松風吹くを直に知り、又雪の降るも直に知るこの意。て我に歸るが さて又浦は 山の風を云ひ、軒近き雪を云ひ、轉じて又浦の波を云ふ。荒き磯 さすが惜しとなり。さて又浦は 邊に寄する波の音を聞きて今夕汐のさすならんと思ひやる心。露の身の 前に「さすやらん」に韻を重ねぬ。子にふりけるかや 親の慈悲にも子の男女によ。露の身の 續古今集に「消えぬべき露のうき身の 一門 門をさす 所狭くすむ 船の中に一門の人々所狭くも住置き所いづれの野邊の草葉なるらん」。名を取り楫 名を取るといふを取楫にか 麒麟も老いぬれ 景清と順次 御座船 安徳天皇の乗り居給ひし船 名を取り楫 け、其縁にて船につゞく。麒麟も老いぬれ

ば云 騏驎は千里の駿馬、驚馬は駄馬なり。戰國策に「騏驎之衰也、驚馬先之、
壽永三年三月下旬

義經が平氏を屋島に破りしは元暦二年二月十九日にして安徳天皇の壽永四年に當れり。此詔に壽永三年とし、
亦三月下旬とせるは共に誤なり。元暦は後鳥羽天皇の年號にして平氏は猶壽永の年號に従ひ居たるものなり、
大正十三年を距ること七百三十九年前。能登守教經 教盛の次男。播磨の室山、備中の水島 室山は播磨國揖保郡室津市
の丘地。水島は備中國淺口郡玉島港の東南四里許りの處に在る岩嶼。水島の戰は壽永二年閏十月木曾義仲が遣
したる矢田判官代義清、海野行廣等の知盛教經に敗られし軍、室山はこれに次ぎて源行家が知盛重衡、盛嗣忠
光景清等に敗られし軍、此年より云へば去年にあらす、一昨年なり。又「身方の利無かつし」とあれど、景清
共に平家の勝利なり。これを此には鶴越の軍と共に一口に義經の謀により敗れしものとして作れり。

これを見て云 平家物語に「(前略)美尾の屋の十郎が馬の左の胸がいくしを等の隠る、程にぞ射込うだ
やがて太刀をぞ抜いたりける。(中略)美尾の屋の十郎小太刀、大薙刀にかなはじと思ひけん、掻いふいて逃
げければやがて續いて追つかけたり。薙刀にて薙がんずるかと思ひけん、さばなくして、薙刀をば左手の脇に
かい挟み右手の手をさし延べて美尾の屋の十郎が甲のしころを掴まんとす。掴まれじと逃ぐ。三度掴みはづし
て四度のため、むすど掴む。暫しぞたまつて見えし、鉢附の板よりふつと引き切つてぞ逃げたりける。(中略)
其後甲のしころをば薙刀の先に貫き高きさし上げ、大音あげて遠からん者は音にも聞け、近くは目にも
見給へ、これこそ京童の呼ぶなる上總の悪七兵衛景清よと名のり捨て、身方の楯の陰へぞ退きける。物々

し 大袈裟 打物 太刀、刀、さもし 卑しの意。詔にては「サモ一 一人を留めん事は、
敵手一人
なり。打物 薙刀の類。さもし シヤ」と引き延べて詔ふ。一人を留めん事は、敵手一人
めて戰はん事は案のうちなりとて打物に云ひか。なにがしは 拙者はどい 兜のしころ 兜の後に垂れ
く。案の内とは思ひ置きし所の意。案外の反對。なにがしは 拙者はどい 兜のしころ 兜の後に垂れ
分。幾程の とも何程の時も生き延びん命ならずの意にて生くに掛く。次句は生 聞き所の燈、あし
く程の命のつらさと續く生きてあるに従つて命あるを辛しと思ふ心。聞き所の燈、あし

さらばよ 父子の相交 留る 父の 行く 子の詞。「そ」は「留る」
す別の辭。留る 父の 行く 子の詞。「そ」は「留る」
「ゆく」の兩語にかゝる。

装束附

- シテ (景清) 面景清、角帽子(沙門に着)、襟淺黄、着附無地熨斗目又は小格子厚板、茶紐水衣、緞子腰帶、墨繪扇、杖。
- ツレ (八九) 面連面、鬘、盃帶、襟赤、着附摺箔、赤地唐織着流。
- トモ (從者) 着附無地熨斗目、素袍上下、小刀、鏡メ扇。
- ワキ (里人) 着附段熨斗目、素袍上下、小刀、鏡メ扇。

九番習
四番目
畧二番目

景清

無季

ワシツト
キテレモ
里景人從
人清丸首

ツレ次第上 (シツトリト運ヒヨク)
ヨク (拍子合)

ツレ方上 (全直ニサラリ)
(拍子不合)

消えぬ便も風あはれも消えぬ便も
風あはれも露の身いづもあはれぬらん
この鎌倉を境に江が谷より丸と申も
女もさても我が父悪七兵衛景
清の平家の身方たるより源氏よ
憎まれ日向の國宮崎とあやみ流さ

景清

ねて年月を送り給ある未だ習を
 ぬ道まがら物憂き事も旅の習又父
 中(聊か寛きカリト) 下(カテ) 秋(カテ) 思寝の流
 心強く
 草の杖露を透くといと
 相摸の國を立ち出で
 立ち出で誰よゆくを遠江は
 遠きは旅舟の河は渡も八橋の
 上(シメヤカニ障リナク) 歌
 打切 打切 打切

雲居の都しつとて假寝の夢よ
 馳けてみん假寝の夢よ馳けてみん
 トモ付(位軽クサラリ) 打切
 やうく歩急むる程よこはは

日向の國宮崎より歩著むる
 ころめて父御の歩行くを歩尋ね
 あらうまらもて
 松のひたり
 ちて年月を送りむらから清光を

景青

上

見ざれど。時の移るやも。辨へむ。暗し
 たる。庵室は。徒に眠り。衣寒。暖は興
 へざれど。膚は。骨と衰へたり。
 小謡 (拍子合)
 地上歌 (物寂シクシクリト)
 ともも世や。背くとあらば墨よこそ。
 背くとあらば墨よこそ。染むべき袖の
 あさまや。裏に墨てたる有様を。
 (前二戻シテ)
 あれだ。夏と思ふ身や。誰こそあ

りて。隣人の憂き言ふものもあ
 憂き言ふものもあ。不思議
 や。ある草の庵をりて。誰にむ
 ぐも見えさるる。聲珍らあり。同ゆ
 る。も。食のありか。軒端も
 遠く見えた。秋まぬ目も
 ちや。見えさるる。風の音信らち

景情

三

も 志らぬ ツレ上 (サラリ) 米 マヨイ のは サ ち チ 暫 サハ 一 ヒト 休

ら ラ 宿 ヤド も モ あ ア げ ゲ の ノ 界 カイ の ノ 處 トコロ あ ア

唯 ツレ 一 ヒト 室 ムロ の ノ み ミ 誰 ナニ と ト 指 サシ して シテ 言 コト 向 ムカヒ せん

又 マタ し シ ち チ ち チ ち チ 答 コタヘ よ ヨ ぐ グ ち チ ち チ ち チ の

藁 ワラ 屋 ヤ の ノ 内 ウチ へ ヘ 物 モノ 向 ムカヒ たい タク う ウ シテ (静ニ何氣ナク)

者 モノ ぞ ゾ 遠 トホ さ サ り リ ぐ グ の ノ 行 ユク く ク ち チ ち チ ち チ 知 チ っ ツ て テ あ ア り

遠 トホ ち チ び ビ 入 イ り リ ぬ ヌ け ケ とも トモ 苗 ネ ち チ ち チ ち チ 申 マウ す ス

い イ ぞ ゾ 平 ヒラ 家 ケ の ノ 侍 サムライ 悪 アク 七 シチ 兵 ヘイ 衛 エイ 景 ケイ 清 セイ

申 マウ ぬ ヌ げ ゲ の ノ 人 ヒト ち チ ち チ ち チ 承 ウケ け ケ り リ 及 キ び

こ コ の ノ 事 コト ち チ ち チ ち チ 目 メ 自 ミ め メ び ビ 目 メ 入 イ り

事 コト あ ア り リ ぬ ヌ け ケ の ノ 事 コト 有 ア 様 サマ 承 ウケ け ケ り

そ ソ の ノ 事 コト ち チ ち チ ち チ 委 イ せ セ ぬ ヌ け ケ り リ ぬ ヌ け ケ り

よ ヨ そ ソ の ノ 事 コト ち チ ち チ ち チ 申 マウ す ス べ ベ かり カリ ぬ ヌ け ケ り

あ ア たら タル ぬ ヌ け ケ り リ ぬ ヌ け ケ り リ ぬ ヌ け ケ り

景清

白

奥へ申し出てもあつて尋ね申さるゝ
シテ(サシ下目ニトッシリ)
 不思議やお唯今の者をいふ者
 ぞと存じていふ。此盲目ある者の子
(親ヲ起シテ)
 ぞといふ。あれ一年尾張の國執田
 まで遊女と相駢れ一人の子を設く。
ニヨシ
 女子あつて何の用よまじくおぞまと思ひ。
 鎌倉る地が江が谷の長よ預け置きた

中ヨク(沈痛ニシタリ)

駢れぬ親子やおあなみ。父よ向つて
ヨクシヨク
 詞やおもを
池上秋(静ニ寂シク)
 見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過し
トモ(シツル)
 心こそあつて親の絆をあらく
トモ(サラリ)
 親の絆をあらく。いふは此あたりの里人
トモ(サラリ)
 のあたりより。里人といふ何の用よ
トモ(サラリ)
 いぞ。遠くへ行くや。

景清

五

平(角立ヲヤウ)

流ハさして入レらるゝも、やとある入レを

序シ尋ヒねらど、平トモ家(サテ)の侍サムライ悪ク七シ兵ヘイ衛ヱ

景ケイ清セイち尋ヒね申シる、唯トモ今(穩カミ)此コノ方カタ序シ

ラ、ヤマカダ陰カゲの書ヤク取テ入レらるゝ

か、トモ其(サテ)書ヤク取テ入レらるゝ

食クツいイらるゝ、コツ其(サテ)首カネ目メが

こコト食クツいイらるゝ、序シ尋ヒね申シる、景ケイ清セイど、トモあアら

不思議(福)也。景清(トモ)の事コト申シ入レらるゝ。

あアら、トモ其(サテ)書ヤク取テ入レらるゝ。吉ユキ愁シウ傷キヤウの

氣キ色シキ見ミ入レらるゝ、何ナニ申シ入レらるゝ。

序シ事ジ申シ入レらるゝ、トモ吉(流ミナクサテ)不ム審シムをモて。

何ナニ申シ入レらるゝ、トモ包ツク女メ申シ入レらるゝ、景清(トモ)の

息ノ女メもモあアらラるゝ、トモ今(キナ)度タビ父チチ御ミよ、吉ユキ

對面タイメンあアらラるゝ、トモ由ユ作サシ入レらるゝ、トモあアらラるゝ

ままで還らば下向の事もかまひの事も
 然るべしと申さるるにやうして。景
 清よりまゝ命を申さして給ひつゝ
(健カニ緩ミナク)
 言語道断。さて景清の消息を
(静メテホキク)
 告げらる。まづ心静めて聞こ
(氣ヲ更ヘテ)
 めとて。景清の両眼盲ひま
(稍コメテハツキリシ)
 して。せんが方おたる髪をおろし日向の

句當と名をいひ給ひ。命を旅人を
 頼みおつらぬまの者の憐れをもつて
 身命をさし給ひ。昔よりさしたる
 所有様を恥ぢ申さして。所名のつな
(氣ヲ更ヘ引ニテ)
 きと推量申して。某唯今所供申し。
(確カリ)
 景清と呼び申さる。我が名をらぞ
(下ニ取リテサフリ)
 答へ。其時は對面あつて。昔今の

舟物語のいづれもまた入渡りのいづれ(エトリテ確カリ)

のう景清のおたりいづれ(前句ヨリ強クニカレテ)悪七兵衛

景清のおたりいづれミテ(中・強ク確カリ)がましく

おあまたよ故郷の者として尋ねて(内トトリ押ヘテ)

此まぎらわぬ身や恥ぢて名のとで帰(音ヲコノチテ大キク)

も悲しさ千行の悲涙袂を打たし中ノヨク(沈痛ニ確カリ)

萬事ハ皆夢のうちのあだ身あり祀(以下氣ヲ乗セテ引立テ)

●獨吟

とらち覺めて今も此世にこころももの

思ひ切つたるも食を景清あんど悪七兵衛景清(カレテ)

あんど呼ばれ此方が答よへき其上(ムツクリ)

我が名は此國の日向といひ日よ向地上歌(軽クナラヌヤウレ引立テ)

日向といひ日よ向ひたる名を呼びヨク

絵をぞかなく捨てし様ら昔も帰らカレ上(重リ引立テ)

己が名の悪心の起さしと思へらも又シツクリ

腹立ちや (ズカリ) 腹 中(氣ヲ張ラズ穩和ニ) 處よ 地(前ヲ受ケテ淀ミナク) 信女あづら
 信女あづら カクガタ 枝持ある方 (コサテ大事ニ) 増まれ
 申きものなら サカ 偏 メクラ 盲の杖 ウシノ 失ふ
 似たる カク 片輪 ハシ ある身 クク の癖 ユル して
 腹悪く 中(ズカリト確カリ) 由 カカ あき ナリテ び ナリテ 唯 内(トツテ静ニ) 許
 ち シカ 目 シカ を イナ 聞 イナ け イナ る イナ 目 イナ を イナ 聞 イナ け イナ る イナ 目 イナ を イナ 聞 イナ け イナ る

知るもの (氣ヲカケテ) ち ハレ 山 カケテ の カケテ 風 カケテ 雲 コト の コト 目 コト を コト 聞 コト け コト る コト 目 コト を コト 聞 コト け コト る コト 目 コト を コト 聞 コト け コト る

おのれをいふ ワ羊(健カ) けしきへいりぬるの事よ

しる (角立タメヤウニ) けしきへいりぬるの事よ

ちくゆりトモ

以前よ。景清の事よ申したる入る

い シテ(ヤササリ) けしきへいりぬるの事よ

ちくゆりトモ

た ワ羊(荒クナラメヤウニ確カリ) けしきへいりぬるの事よ

い イワ けしきへいりぬるの事よ

い ツツ けしきへいりぬるの事よ

い イタ けしきへいりぬるの事よ

い ツレ(調子高ニカツテ) けしきへいりぬるの事よ

い カン中(少シ静ナテ調子ヨク) けしきへいりぬるの事よ

い (拍子下) けしきへいりぬるの事よ

い ココロサシ けしきへいりぬるの事よ

い タ けしきへいりぬるの事よ

い シテ中(氣ヲコメテキク) けしきへいりぬるの事よ

包み隠きと思ひしは顯れけり露
 の身の置き處も恥ぢりや身
 花の姿まで親子と名のり給はら
 ころよ我が名も顯るべしと思ひきり
 つまじき事ありあはれ恨と思ひ
 地中(稍サリ)あはれはよまへを疎き人も訪入
 かしこ怒み詠の其報はけり

小話

だもも訪をれしと思ひ悲し
 上秋(穩健ニ運ビヨク)一門の船のらち肩
 ち並べ膝を組みて處狭きまむ日の
 景清ハ入誰よりも法座(確カリ)船よあきて痛よ
 まど一類其以下我略さまぐよ多
 けいど名を取り楫の舟のせを從
 隠ありしはさも蓋はまわたり

身（シツカ）の（チ）騏驎（キリン）も老いぬ（オ）を（イ）驚馬（オドロキウマ）子（コ）劣
（チ）る（シ）が（ク）如（ニ）く（シ）あり（ウ）。 （氣ヲカヘテ） 早（ハヤ）白（シロ） （稍穂カニ確カリ） あら痛（イタ）き（ヤ）ま（ツ）つ
 かり渡（ワタ）つ（シ）ら（シ）い（シ）。 （氣ヲカヘテ） 景清（キョウセイ）の申（ウケ）ひ（シ）。 侍女（シヤウメ）
（シ）締（シメ）の（シ）所（トコロ）頭（カビ）の（シ）る（シ）。 （シメテ） （静ニスラリ） 何（ナニ）事（コト）も（シ）ら（シ）ぞ
（ヤ）屋（ヤ）島（シマ）も（シ）景清（キョウセイ）の（シ）高（タカ）名（ナ）の（シ）や（シ）ら（シ）ら（シ）
 聞（キ）こ（シ）一（ヒト）女（メ）か（シ）した（シ）由（ユ）作（シ）ら（シ）と（シ）ら（シ）と（シ）ら（シ）
 侍物語（シヤウモノトワリ）の（シ）あ（シ）つ（シ）て（シ）聞（キ）かせ（シ）申（ウケ）た（シ）と（シ）ら（シ）

（シメテ） （静ニ底カアリテ） 侍物語（シヤウモノトワリ）の（シ）あ（シ）つ（シ）て（シ）聞（キ）かせ（シ）申（ウケ）た（シ）と（シ）ら（シ）
 の（シ）不（フ）便（ベン）の（シ）程（ほど）は（シ）語（コト）つ（シ）て（シ）聞（キ）かせ（シ）ら（シ）と（シ）ら（シ）
 此（コノ）物（モノ）語（コト）過（ワタ）し（シ）た（シ）と（シ）ら（シ）。 （フ）あ（シ）の（シ）者（モノ）を（シ）や（シ）ら（シ）と（シ）ら（シ）
（サ）里（サ）へ（シ）帰（カエ）て（シ）終（ハ）つ（シ）ら（シ）と（シ）ら（シ）。 （ヤ）心（ココロ）得（トク）申（ウケ）ひ（シ）。
 侍物語（シヤウモノトワリ）過（ワタ）し（シ）た（シ）と（シ）ら（シ）。 （シメテ） （底カアリテ氣ヲ張り） 侍（シヤウ）申（ウケ）ひ（シ）。
 暮（ク）る（シ）と（シ）ら（シ）。 （シ）ぞ（シ）其（ソノ）頃（キタマ）の（シ）壽（ス）守（シ）水（ミヅ）三（サン）年（ネン）

三日月下旬の事ありし。平家八船
 源氏の陸陣や海岸に張つて互に
 勝負を^(トウシリ)決せん^(ツヨク)と欲せ^(カレ上ヤ、抑)能登の守教経
 宣^(ノクモ)より。去年播磨の室山備中の
 水島鶴越^(ツシマ)よりまで一度も身方の
 利無^(リ)ありし事^(ト)。偏^(ヒト)に義経が謀^(ハカリ)りみだ
 きたりあり。いふもして九郎を

地拍子
 物持
 物持
 物持

討^(ウ)た^(ト)ん^(ト)。謀^(マカ)こ^(ト)あ^(ラ)ま^(ホ)し^(レ)る^(ト)宣^(ノ)ぶ^(ト)。
 景清^(キョウセイ)は^(ハ)思^(オモ)ひ^(マ)や^(リ)判^(ハ)官^(クワン)あ^(リ)て
 鬼神^(オニカミ)も^(モ)あ^(ら)ざ^(ら)ず^(ト)命^(イノチ)を^(シ)捨^(ス)て^(ガ)
 易^(ヤス)かり^(ト)あ^(ら)ず^(ト)思^(オモ)ひ^(マ)。教^(ノ)経^(キョウキョウ)は^(ハ)最^(サイ)期^(キ)の^(ゴ)暇^(ト)
 乞^(ヒ)ひ^(マ)陸^(リク)は^(ハ)あ^(ら)ざ^(ら)ず^(ト)源^(ゲン)氏^(シ)の^(ツ)兵^(ヘイ)あ^(ま)ま^(ま)を
 ま^(ま)を^(シ)驅^(カ)け^(テ)向^(ム)ふ^(ト)。景^(キョウ)清^(セイ)と^(シ)て
 見^(ミ)て^(ガ)景^(キョウ)清^(セイ)と^(シ)て^(ガ)物^(モノ)持^(モチ)り^(ト)や^(と)。
 景^(キョウ)清^(セイ)

ひらめかいて
地拍子
持
ひらめかいて

地拍子
のがき

地拍子
源平五よ

夕日影は打ち物ひらめかいて。斬つて
 かしらぐらきして。刃むいたる兵の
 四方へぞつもぞ逃げよけるのがきと
 中(静) 確カリト
 さもうや方ごよさもうや方ごよ
 源平五よ目も恥かへんあ
 中(確カリト) 出デ弛(ナク)
 上(確カリト) 出デ弛(ナク)
 人事の案のらち物小脇よあいらんで
 あまがりの平家の侍悪七兵衛景

地拍子
景清と

清と名のりあけ名のりあけ手とりよ
 せんそそ逃がて行く。三保の谷が著
 たりける。兜のまところをとりはづ
 取りはづ。こ二度逃げのびたねも
 思ふ敵をねぞのがきと飛びかり
 兜やおつり。えいやと引く程よまこ
 ろの切れて。此方よりあしひらめかいて

逃ニげハのハびニぬハ遙ニ隔ハてハ立チ帰リのハる
(唯カリ)
 至スもハ怒リやハ腕ノ強キをハりハけ
(氣ヲカケテ進ム)
甲れハ景清のハ三保のハ公ノ頭ノ骨ノこトも
(静高著カセ)
中強クけレとハ笑ヒてハ左ノ右ノのハまヨけル
(氣ヲ更ヘテ濕ヤカニ)
中昔忘れぬ物語衰入果てはハ入れぬ
中けらどや恥かやハ此世らもも後
上程ノ命ノつらまはしはばハまら帰ル
(通チヲカヘ物哀レニ抑ヘテ)

りハあまい跡をハ弟ハ給ハ入目のハ境ノ所ノ
(心持シテ)
 のハ燈ノあまい首橋ノ頼むべしからも
マよ止るハ行くどの唯一聲ヲ聞き
マ残をこれぞ親子のハあまいあるハらしど
イ親子のハあまいあるハらし

杜若

解題

燕子花とも書く。業平に歌はれし八橋の杜若の精、伊勢物語の昔を語りて旅僧の弔を受くることを作れり。弘河原勸進申樂記に寛正五年四月十日同勸進申樂の三日目に音阿彌が演せしこと、親元日記に寛正六年二月廿八日觀世が演せしこと、飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日觀世又三郎等が演せしこと、粟田口猿樂記に永正二年四月十三日今春流勸進申樂の初日に演せしこと、申樂談儀の後人の加筆と見ゆる中に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能に演せしこと等、諸書に上場の記録見え、禪鳳習道目錄にも曲名出づ。世阿彌の作と傳ふ。古く異名を八橋と稱せしが如し。

能之小書

彩色、戀之舞、素囃子、伊勢之傳四種の小書あり、中にも戀之舞の時は、クリ、サシ、クセを抜き、シテの蓋、花前に蝶舞ふに續く。序の舞の中にも我が影を水にうつし見る形など有り。

謠ひ方便概

優麗にして浮きやかならず、品位有りて重くならぬやう、概ねすら／＼として蟻り無きを旨とし、其間趣深かるべきものとす。

シテ

歌人に歌はれたる美しき花の精にして能にても三番目の曲玄物として扱ふ曲なれば、シテは總じて品の詞は前よりも調子を聊か下げて謠ひ出し、「さすがに此杜若は」と少しく氣を更へ、「色も一入」以下柔かにかゝつてうたふ。「伊勢物語にいはいはく」云々は通じて確りと扱ひ、掛合に入りても落着きて靜に承け渡し、順次氣を乗せて行く。地の上歌濟みての詞は稍輕やかにあるべし。「のう／＼此冠」云々は業平の姿を假りて立ち出でたる處なれば、一息間を取り、引立てはつきり謠ふ。此「のう／＼」は出の呼掛の如く長く大きく扱はぬが宜し。以下ワキとの問答、掛合、心得は物着前と大差なし。「別れこし」は一聲の調子にて節を大きく、引立てゝ謠ひ、「そも／＼此物語は」よりクリの調子にかへ、少しく氣をかけて確りと、サシは晴れやかにすらりと扱ふ。クセのうち初の上端は明かにゆつたりと、後なるはさらりとあるべし。「花前に蝶舞ふ」はゆるやかに、「植ゑおきし」のワカは長閑に、「昔男の」云々はさらりと取り、「蟬の唐衣の」は確りと扱ふを宜しとす。

ワキ

位は普通なれども三番目物なれば稍靜なるべし。「げにや光陰」云々は少しく間をおきてさらりと謠ふ。シテとの問答、掛合、常と異なることなし。昔は能に僧ワキの重る時素袍男に更へ「諸國一見の僧」と

あるを「諸國一見の者」、「のうく御僧」を「のうく旅人」と謠ひ更へたる例あれども近時は此事廢れたり。

地 「在原の」は更へてや、靜なるうちにもすらりと、餘情有るやうに謠ふ。「遙々きぬる」は地次第なれば音クセまで變らず。クセは初を靜に稍確りと出、初の上端後より位をす、め、後の上端以下は更にさらりと謠ふ。而も通じて優なるべし、亂がはしくなるべからず。「柳上に鶯飛ぶ」は序の舞の前なれば位を靜に締めて扱ひ、舞後キリへかけては寛りと、乗り好く謠ふべし。

辭解 洛陽 京都を指す。行脚 僧侶の修行の爲の旅行。美濃尾張 身の終に通せしむ。身の果の意。光陰 日。草木心なし 動物を有情といひ、植物を非情といふによる。

顔佳花 杜若の異名。八橋 三河國碧海郡知立町の東に八橋といふ村ありしが、今は知立町に屬する大字となれり。土俗昔の杜若の名勝は此地なりと傳ふれども、此名は伊勢物語に出でたるものにて必ずしも確としたる地名とは云ひ難し、深く其古跡を穿鑿するにも及ぶまじきか。

名に負ふ 有名なる。なべての花 有りふれ。ゆかり 紫色の異名と縁の意を兼ねぬ。思ひなぞらへ 思ひなす意。取りわき 取り分けての意。特別に。心なき 心無らぬ意。

伊勢物語 伊勢物語は和歌を基として書き集めたる物語集なり。作者詳ならずして古來諸説して一部の物語を成したるならんといふ平田篤胤の説當れるにちかざるべし。古は業平の自叙歌傳のやうに云ひなしたれば謠曲は皆之に従へり。同書に「昔、男ありけり。その男、身を要無き物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき國もとめて行きけり。もとより友とする人一人二人して行きけり。道知れる人も無くて惑ひ行きけり。三河の國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋と云ひけるは、水行く川の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるによりてなん八橋と云ひける。其澤の邊の木の下にあり居て餉(かきいひ即ち干飯)食ひけり。其澤に杜若いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰く、かきつばたと云ふ五文字を句のかみにするぞ旅の心を詠めと云ひければ、詠める」として「から衣着つなれにしましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ」の歌を載せたり。「水ゆく川の蜘蛛手」とは川の水數條に別れて小き流の八方に流れたるをいへり。蜘蛛

蜘蛛は蜘蛛の足の形に喩へ云へるなり。かきつばたと云ふ五文字を句のかみに置くとは折句と稱する一種の體にて五七七七七の五句の頭字に其五文字を詠み込みて作る技巧の歌の體なり。此歌はかきつばたの五字を毎句の上字に置きて折柄の旅人の心を歌へるなり。歌意は、都に馴れたる女を殘せる身なれば斯く旅路にありて遠く來りしことを心細く思ふとなり。衣は着馴るゝものなれば馴れにしの序とせり。唐は唐様といふ意にて深き義あるにあらず。又つまは必ずしも正妻の意にあらず。情交ある女を親みて云へるなり。此つまは、はるくきぬる、いづれも衣の縁語なり。

在原の業平 平城天皇の御子なる阿保親王の第五子。兄行平と共に在原姓を賜ひし人、左近衛中将たり。勤王の志篤かりし。東國の謂 廣く東國の謂。心の奥ふかき 歌に寄す心の深きを陸奥にかけていふ。こりわき心の 云ふことに深く心に掛け居たりし如く云ひて橋。三河の澤 橋といふはんために國。思の色 物を思ふ心の顔色に現るゝをいふ語。轉じて紅色の異名となりたる語なれど、この名を出す。には馴れしつまを思ひし心の色といふ程の意にて杜若の花の色にいひかけ、伊勢物語又は古今集の詞書によりて後世に傳へたるを、古今集の序に貫之が業平の歌を昔に業平 昔になりと評して「しほめる花の色なくて句殘れるが如し」といへるに思ひ寄せて綴れるなり。

昔に業平 昔になりと評して「しほめる花の色なくて句殘れるが如し」といへるに思ひ寄せて綴れるなり。

かたみの花 業平の形見と見るべき花。跡な隔てそ 形見と思ふ心を隔つるなどの意。次に垣によ蜘蛛手に物ぞ思はるゝ 心のいろくに思ひ亂るゝ意。續古今集に「戀せよとなれる やがてなれぬ

る 唐衣の歌の詞は馴れしつまを思ひいでなれど、今もかく冠からきぬ 冠は男子禮装の時に用ふる語る間に旅人を馴れしく思ふやうになりたりとなり。冠からきぬ 冠は男子禮装の時に用ふる語る間に旅人を馴れしく思ふやうになりたりとなり。冠からきぬ 冠は男子禮装の時に用ふる語る間に旅人を馴れしく思ふやうになりたりとなり。

賤 卑き世渡りをなせる庶民。ふしど 臥る室。賤の宿なれば透額の冠 額に月形のすかしにかさぬる短き衣。高子の后 藤原長良の女、清和天皇の中宮となり二條の后と呼ばれし人、入内の前業子の用ひしもの。

高子の后 藤原長良の女、清和天皇の中宮となり二條の后と呼ばれし人、入内の前業子の用ひしもの。

平と契り、一夜業平に誘はれて共に家を遁れたるも途に捕へられしこと伊

子

勢物語に 豊の明 朝廷にて毎年十一月新嘗祭の翌日行はれし節會(式宴) 五節の舞 豊明の節會の日舞姫の奏せし舞曲。業平の舞に加はる筈なし、五節の舞の日

業平の着たる冠の謂にや。先づ置く置きぬ 冠唐衣の談は一精魂植ふおきし 後撰集に「藤原のかつみの命婦に住み侍りける男、人の手にうつり侍りにける又の年、杜若につけてかつみに遣しける」と詞書して「いひ初めし昔の宿の杜若色ばかりこそ形見なりけれ」とあるを、第一句を更へて引けり。女の杜若になりし事は、雲玉集に此歌を載せ、男の夢に女の詠みし返歌を載せて「杜若の精の歌なり。これより女を杜若といふ」とあるによるなるべし。原歌の詞書は、かつみの命婦の許に通ひ居たる男、その命婦が他の人に心を移しての翌年、杜若につけて歌を送りたりとの意にて、歌は契りそめし去年の宿に此年は杜若の花の色形見となりて残れるばかりなりとの意。 極樂 佛果を得たる亡者往生する浄土。 歌舞の菩薩 歌舞を奏し讚嘆して、往生人を歡樂せしむる菩薩衆。業平を極樂の歌舞の菩薩といへるは、鴉鷲記 化現 神佛などの姿に一かの中將(業平)は極樂の歌舞の菩薩、まさに觀音の化身なり」云々とあるに據る。 草木までも

に現はる 法身説法の 和歌の言の葉までも法を説く聲なればの意。止觀に「風音水音、我等言語、鳥鳴聲、何者不三諦佛性聲、是曰法身説法」。 草木までも

中陰經に「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」とあるを引き、昔男 伊勢物語の段毎の初に「昔男」と和歌も直に法文なれば草木と雖も成佛の縁あるものといひなせり。 昔男 書き出せるを凡て業平を指すものと

のとして直に昔男 衆生と業平 歌舞の菩薩が假に人間 衆生濟度の方便として、佛菩薩が假に神と呼びなせり。 衆生と業平 になりてと云ひ掛く。 本地 衆生濟度の方便として、佛菩薩が假に神地と云ふ。 寂光の都 理體と智恵との合一せる眞佛の淨土。即 佛果の岸に到らしむること。 濟度 衆生をして生死の海を度らしめ、

利生 衆生を利益 する 別れこし跡の怨 唐衣の歌の心を反覆し馴れしつまに別れ來たりし恨みを述べ、唐衣の袖を都にかへさんと云ひて都に歸らんことを願ふ意に

こと寄せ、舞を舞はんとするを敘せり。此に舞はんと 信夫山 伊勢物語に「信夫山忍びて通ふ道もがな人するは歌舞の菩薩の化身といへるを受けたるなり。」 信夫山 の心の奥も見るべく。」道より芝に續け芝

の葉を始の「は」に云ひかく。信夫山は岩代信夫郡にある山の名。露の縁にて忍草といはんとし、昔男初冠 信夫の詞に續けたり。始も無く終も無しとは片々たる歌語を集めたる物語の草子なればなり。

して 伊勢物語の第一段を其まゝ引く。それに「昔男、初冠して奈良の京春日の里に知るよし、て狩にい 初冠は初めて冠を頂く意にて元服の事。奈良の京春日の里は今奈良市のうち。知る

よし、ては領地ありての 仁明天皇 紀元千四百九十三年 即位、在位十七年。 御宇 御代 畏き もつた 大内山 禁中。山

け、更に立つと續く。彌生 三月の 異稱。 春日の祭の敕使 御代拜を勤むる敕使。春日の祭は毎年十一月、

へるは春日の文字に續けんてか。又業平が此御使に 一度は榮え 菅原道真公の詩句に「一榮一落是春秋」。 雲の伊勢

さ、れしといふは冷泉流伊勢物語註に従へるなり。一度は榮え 菅原道真公の詩句に「一榮一落是春秋」。 雲の伊勢

雲の居るといふ音をうけて伊勢といひ、伊勢物語の詞に續く。同書に「京にありわびて、あづまに往きけるに伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て」と記して、いとどしくの歌を載す。海づらは海に面した いとどしく 伊勢物語の歌。第二句原歌「過ぎゆく方の」後撰集に業平の歌とあり。過ぎ來りる道。 いとどしく 伊勢物語の歌。第二句原歌「過ぎゆく方の」後撰集に業平の歌とあり。過ぎ來りる道。

を故郷に歸る事 くゆる 烟 信濃なる淺間の嶽に 伊勢物語に「(前略)信濃の國淺間の嶽に烟の

異本に「をちこち」とあれど流布本は皆「をちかた」なり。信濃なる淺間の嶽に烟の立つを見れば自分の如き遠方の方には見咎めずしては過ぎ難しとの意(此解舊説に従はず)。都に見馴れぬ凄じきものを見て旅の心細さの身に迫り覺えたる 口ずさび 微吟す 名にある 有名 其品多き 物語の中にはさまざま 底ひな

く かぎりなく深きこと。水の深き 名をかへ品をかへ 物語中に名をかへ事柄をかへて様々に書かれ

の理を解くものなりと、「我身 人待つ女 伊勢物語(上略)さりければかの女大和のかたを見やりて「君が

ひとつは」以下の文に續く。

あたりに見つゝを居らむ生駒山雲なかくし雨はふるとも」といひ

て見いだすに辛うして大和人來んといへり。よろこびて待つに、たび／＼過ぎぬれば、「君こんといひし夜も
 ごとに過ぎぬれば頼まぬもの、戀ひつゝぞをる」といひければ、男住ますなりにけり」とある一段をいふ。
 のやみ 同書に又「むかし男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にもいはんと思ひけり。う
 ちいでんこと難くやありけん、ものやみになりて死ぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、
 親聞きつけて、泣く／＼告げたりければ、まどひ來りけれど死にければ、つれ
 なくと籠り居りけり」とある一段を云ふ。ものやみは物を思ひて惱み病む事。玉簾の 同書に「昔、男、女、
 せざりければ、いづくなりけんあやしきによめる」と書きて「吹く風にわが身をなさは玉すだれひまもどめつ
 と入るべきものを」ととりとめぬ風にはありとも玉すだれ誰が許さばか隙求むべき」の贈答の歌を載せたる其一
 段。飛ぶ螢の 伊勢物語に「ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風吹くとかり 暗きに行かぬ 難義抄
 慶四年五月廿七日の夜、よわげに見え給ふ(業平)時、有常の息女、枕により面を合せて悲みの涙を流して曰く
 君失せなん後は思ひの闇に迷ひて、罪深き道に赴き、暗きより暗きに至りなんといへるによめる」と記して「知
 るや君我になれぬ世の人の暗きに 月やあらぬ 伊勢物語の歌に「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが
 ゆかぬ便りありとは」とあるによる。 本覺眞如の身 宇宙法界の根本體たる 花前に蝶まふ 百聯抄解の詩句。熊
 本の身といふは前にい 菖蒲の髪 五月五日の節會に菖蒲の鬘を冠 杜若花菖蒲 杜若と花あやめと
 かに 昔なりけれ 前に解ける云ひをめし云々の歌の第五句「形見なりけ 花橋の 伊勢物語の歌に「さ
 らげば昔の人の袖の香 ぞ」するところを引く。 菖蒲の髪 五月五日の節會に菖蒲の鬘を冠 杜若と花あやめと
 れが濃きかといふ「この音を以て梢を出だし、轉じて 袖白妙の 衣色目に「卵の花衣は裏表白し、或は
 蟬を云ひ、蟬の殻を唐衣に云ひ掛け、衣の袖と續く。 東雲 夜の明方。それを受けて朝
 雪に喻へし例多きによりて雪といひ、語を隔て、白妙と續く。

草木國土、悉皆成佛 前に云へる 中陰經の句 御法を得て 成佛して

装束附

- シ テ (杜若の精)
 - 面深井小面又は若女、鬘、鬘帶、襟白赤又は白淺黄、着附摺箔、色入縫箔腰卷、唐織着流、縫入腰帶、鬘
 - 扇、物着に唐織脱ぎ、初冠綾附け、長絹(紫、白又は花色地)、縫箔腰帶。
- ワ キ (旅僧)
 - 着附無地鬘斗目又は小格子、水衣、腰帶、扇、珠數。

三番目

杜若

四月

ワシキテ 杜若の精女 旅僧

羊引(常/位=精静)
 といひ諸國一頁の僧まてい。あは此向ハ
 都よひひて。洛陽の名所舊跡残なく
 一頁仕りてい。又これより東國行脚と
(大キク)
道行上(穩カ運ビヨク)
ヨウク(抽子金)
 心ざしぬ。タベタベの假枕タベタ
打切
 べの假枕宿りあまたなまなりも。因ド
 憂き寝の美濃尾張三河の國よ

杜若

著^{カキツダ}かよ^{カキツダ}け^{カキツダ}つ^{カキツダ}の^{カキツダ}國^{カキツダ}も^{カキツダ}し^{カキツダ}か^{カキツダ}も^{カキツダ}て^{カキツダ}

和(氣ヲ更ヘテスラリ)

急^{カキツダ}ぎ^{カキツダ}の^{カキツダ}向^{カキツダ}程^{カキツダ}も^{カキツダ}ず^{カキツダ}に^{カキツダ}河^{カキツダ}の^{カキツダ}國^{カキツダ}も^{カキツダ}著^{カキツダ}か^{カキツダ}て^{カキツダ}る。

(氣ヲカヘテ心静ニ)

又^{カキツダ}い^{カキツダ}て^{カキツダ}も^{カキツダ}の^{カキツダ}澤^{カキツダ}豊^{カキツダ}し^{カキツダ}の^{カキツダ}杜^{カキツダ}若^{カキツダ}の^{カキツダ}今^{カキツダ}も^{カキツダ}盛^{カキツダ}ん

カレ上(朗カニサラリ)

見^{カキツダ}え^{カキツダ}て^{カキツダ}る^{カキツダ}。ま^{カキツダ}ち^{カキツダ}よ^{カキツダ}う^{カキツダ}眺^{カキツダ}め^{カキツダ}が^{カキツダ}や^{カキツダ}も^{カキツダ}思^{カキツダ}ひ^{カキツダ}ら

(拍子不合)

げ^{カキツダ}よ^{カキツダ}や^{カキツダ}光^{カキツダ}陰^{カキツダ}も^{カキツダ}ま^{カキツダ}ら^{カキツダ}む^{カキツダ}春^{カキツダ}過^{カキツダ}ぎ^{カキツダ}も^{カキツダ}夏^{カキツダ}も

ま^{カキツダ}て^{カキツダ}。草^{カキツダ}木^{カキツダ}も^{カキツダ}あ^{カキツダ}ら^{カキツダ}む^{カキツダ}申^{カキツダ}や^{カキツダ}も^{カキツダ}時^{カキツダ}を^{カキツダ}忘^{カキツダ}

れ^{カキツダ}ぬ^{カキツダ}花^{カキツダ}の^{カキツダ}色^{カキツダ}顔^{カキツダ}佳^{カキツダ}花^{カキツダ}も^{カキツダ}も^{カキツダ}申^{カキツダ}ま^{カキツダ}や^{カキツダ}ら^{カキツダ}ん。

申^{カキツダ}。あ^{カキツダ}ら^{カキツダ}美^{カキツダ}の^{カキツダ}杜^{カキツダ}若^{カキツダ}や^{カキツダ}あ^{カキツダ}の^{カキツダ}う^{カキツダ}く^{カキツダ}

寺^{カキツダ}僧^{カキツダ}何^{カキツダ}の^{カキツダ}其^{カキツダ}澤^{カキツダ}も^{カキツダ}何^{カキツダ}ら^{カキツダ}び^{カキツダ}給^{カキツダ}ひ^{カキツダ}ら^{カキツダ}ぞ

和(静ニサラリ)

と^{カキツダ}い^{カキツダ}は^{カキツダ}諸^{カキツダ}國^{カキツダ}一^{カキツダ}見^{カキツダ}の^{カキツダ}者^{カキツダ}も^{カキツダ}て^{カキツダ}ら^{カキツダ}う^{カキツダ}。杜^{カキツダ}若^{カキツダ}の

面^{カキツダ}白^{カキツダ}さ^{カキツダ}よ^{カキツダ}眺^{カキツダ}め^{カキツダ}の^{カキツダ}居^{カキツダ}も^{カキツダ}て^{カキツダ}ら^{カキツダ}う^{カキツダ}さ^{カキツダ}ら^{カキツダ}び^{カキツダ}ら^{カキツダ}く

シテ(閑雅ニ下メトリテ)

と^{カキツダ}申^{カキツダ}は^{カキツダ}ぞ^{カキツダ}。と^{カキツダ}い^{カキツダ}は^{カキツダ}河^{カキツダ}の^{カキツダ}國^{カキツダ}ハ^{カキツダ}橋^{カキツダ}と^{カキツダ}て。

此杜若ハトモ

杜^{カキツダ}若^{カキツダ}の^{カキツダ}名^{カキツダ}所^{カキツダ}も^{カキツダ}て^{カキツダ}ら^{カキツダ}う^{カキツダ}さ^{カキツダ}ま^{カキツダ}が^{カキツダ}よ^{カキツダ}此^{カキツダ}杜^{カキツダ}若^{カキツダ}ハ。

名^{カキツダ}も^{カキツダ}あ^{カキツダ}ら^{カキツダ}花^{カキツダ}の^{カキツダ}名^{カキツダ}も^{カキツダ}て^{カキツダ}ら^{カキツダ}う^{カキツダ}あ^{カキツダ}れ^{カキツダ}が^{カキツダ}。色^{カキツダ}も^{カキツダ}一^{カキツダ}の^{カキツダ}

カレ上(傷ニカマツテ)

早(荒々シク)上(カクワテ)

あら面白(アゲマ)やさして此東のはての國(オクニ)

までも業平(クダ)の下の絵(シテ)ひける事(アタラ)新(新)

一(トイ)き回(ゴト)事(事)ある此橋(カ)のこのみ(ミ)猶(ナ)

もこの真深(マコト)ま名所(ナト)名所の道(ミチ)をがら

國(クニ)とさう(サウ)の多(タ)け(ケ)ぬ(ヌ)も取(ト)り(リ)も(モ)き(キ)ひ(ヒ)の

末(スエ)あ(ア)り(リ)て思(オモ)ひ渡(ワタ)り(リ)橋(ハシ)の三河(ミカワ)

の澤(サハ)の杜若(ツクシ)遠(トホ)く(ク)来(キ)ぬ(ヌ)旅(ツリ)や(ヤ)ど

早(サ)思(オモ)の色(イロ)を(ヲ)世(ヨ)よ(ヨ)残(ノコ)して(シテ)昔(コト)の業(ノ)

平(ヘ)あ(ア)ぬ(ヌ)も(モ)かた(カ)み(ミ)の(ノ)花(ハ)ハ(ハ)今(イマ)こ(コ)よ(ヨ)

在原(ノ)の跡(ノ)を(ヲ)隔(ヘ)て(テ)杜若(ツクシ)跡(ノ)を(ヲ)隔(ヘ)て(テ)

杜若澤邊(ツクシノサハノヘ)の水(ノ)の浅(ノ)から(ノ)も(モ)契(ツク)り(リ)

人も(ヒト)ハ橋(ハシ)の蜘蛛(クモ)手(テ)も(モ)物(モノ)ぞ思(オモ)は(ハ)ら(ラ)ぬ(ヌ)

今(イマ)も(モ)旅(ツリ)人(ヒト)よ昔(コト)を語(カ)り(リ)け(ケ)た(タ)の暮(ヨル)

やど(ヤド)馬(ウマ)れぬ(ヌ)心(ココロ)あ(ア)やど(ヤド)馬(ウマ)れぬ(ヌ)

●小 謠 (拍子合)

地上歌 (静ニスラリ)

(シツメル) 下こウシテ和(静ニ)

さらあま。いも申おぐれ申のり

早(サナリ)

何事もてさぞ 見替へくさくも。

シツメ(シトヤカニ)

あらさぐ庵もて 一夜や光明あり

早(サナリ)

あら嬉しや頓て素つぎへ」のうく

シツメ(引立テ、ハフキリト)

物者

此冠からまぬ吉障へく 不思議

早(角立タマヤウニ)

やま卑しき賤のがへらもつ。色もあま

やく衣や著。秀類の冠や著。い見

この冠の。いさもつ。いさもつ。いさもつ

シツメ(シトヤカニ)

いさもつ。いさもつ。いさもつ。いさもつ

のたの吉衣もく。いさもつ。いさもつ。いさもつ

舞臺の明の五節の舞の冠もつ。いさもつ

みの冠唐衣。身はほへ持ちて。いさもつ

早(サナリ)

冠からまぬ。いさもつ。いさもつ。いさもつ

身はほへ。いさもつ。いさもつ。いさもつ

シツメ(静ニ内トサテ)

真のわいの杜若

の精あり。植ゑ置き。昔の宿の杜若と。
 よみも女の杜若よ。ありしをこの
 言葉あり。又業平の極樂の歌舞の
 菩薩の化現あり。詠み置く和歌の
 言の葉までも。皆法身説法の妙文
 あり。草木までも露の恵の佛果の
 縁を弔ふあり。これこそ世の奇持

かなぶき非情の草木よ。詞やあを
 き法の聲。佛事やあもや業平の
 昔男の舞の姿。これぞ即ち歌舞
 の菩薩の假も無生と業平の
 本地寂光の都を出で。普く
 濟度。利生の道よ。遠ぶき
 めの唐衣。遠ぶきぬる唐衣。著つや

ハ

ハ

(サフリ)
(氣ラカヘテ)
(ゴクカラフ)
(ホツシン)
(セツホオ)
(カニ上)
(静ニスラリ)
(角立ヲ列ヤウ)
(拍子不合)
(漸次ニ氣ヲ乗セテ)
(優ニツカリ)
(前ヨリ下ニ寛ク)
(健カニ氣ヲ乗セテ)
(地次免カ)
(拍子合)

●は舞

舞シテ上をイロヘあシテ上らシテ上ん朗カニ大キク。跡シテ上の拍子不合
 怨カクシのカクシ唐カクシ衣カクシ袖カクシをカクシ都カクシよカクシ返カクシさカクシぎカクシやカクシ
シテ上そイロヘもイロヘりイロヘくイロヘ此イロヘ物イロヘ語イロヘらイロヘいイロヘらイロヘるイロヘ人イロヘのイロヘ何イロヘ事イロヘよイロヘ
シテ上よイロヘつイロヘてイロヘ思イロヘのイロヘ露イロヘのイロヘ信イロヘまイロヘ山イロヘ忍イロヘびイロヘてイロヘ
シテ上通イロヘよイロヘ道イロヘ芝イロヘのイロヘ始イロヘもイロヘあイロヘくイロヘ終イロヘもイロヘあイロヘ
サシクセ昔イロヘ男イロヘ初イロヘ冠イロヘしてイロヘ奈イロヘ良イロヘのイロヘ京イロヘ春イロヘ日イロヘのイロヘ里イロヘよイロヘ
切迄知イロヘるイロヘよイロヘりイロヘまイロヘじイロヘてイロヘ狩イロヘはイロヘ行イロヘはイロヘけイロヘりイロヘ
地天イロヘ皇イロヘのイロヘ吉イロヘ宇イロヘおイロヘとイロヘよイロヘいイロヘらイロヘもイロヘ畏イロヘまイロヘ敷イロヘをイロヘ
地受イロヘけイロヘてイロヘ大イロヘ内イロヘ山イロヘのイロヘ春イロヘ霞イロヘたイロヘらイロヘやイロヘ弥イロヘ生イロヘのイロヘ
地初イロヘつイロヘ方イロヘ春イロヘ日イロヘのイロヘ祭イロヘのイロヘ敷イロヘ使イロヘとイロヘしてイロヘ透イロヘ額イロヘ
地のイロヘ冠イロヘをイロヘ許イロヘさイロヘるイロヘ君イロヘのイロヘ惠イロヘのイロヘ深イロヘまイロヘ敷イロヘ
地殿イロヘ上イロヘまイロヘのイロヘ元イロヘ服イロヘのイロヘ事イロヘ昔イロヘ時イロヘ其イロヘ例イロヘ稀イロヘ
地あイロヘるイロヘ故イロヘよイロヘ初イロヘ冠イロヘとイロヘらイロヘ申イロヘさイロヘとイロヘあイロヘやイロヘ然イロヘれイロヘ
地もイロヘ世イロヘのイロヘ中イロヘのイロヘ一イロヘ度イロヘのイロヘ榮イロヘえイロヘ一イロヘ度イロヘのイロヘ衰イロヘ

サシクセ●昔イロヘ男イロヘ初イロヘ冠イロヘしてイロヘ奈イロヘ良イロヘのイロヘ京イロヘ春イロヘ日イロヘのイロヘ里イロヘよイロヘ
切迄知イロヘるイロヘよイロヘりイロヘまイロヘじイロヘてイロヘ狩イロヘはイロヘ行イロヘはイロヘけイロヘりイロヘ
地天イロヘ皇イロヘのイロヘ吉イロヘ宇イロヘおイロヘとイロヘよイロヘいイロヘらイロヘもイロヘ畏イロヘまイロヘ敷イロヘをイロヘ
地受イロヘけイロヘてイロヘ大イロヘ内イロヘ山イロヘのイロヘ春イロヘ霞イロヘたイロヘらイロヘやイロヘ弥イロヘ生イロヘのイロヘ
地初イロヘつイロヘ方イロヘ春イロヘ日イロヘのイロヘ祭イロヘのイロヘ敷イロヘ使イロヘとイロヘしてイロヘ透イロヘ額イロヘ
地のイロヘ冠イロヘをイロヘ許イロヘさイロヘるイロヘ君イロヘのイロヘ惠イロヘのイロヘ深イロヘまイロヘ敷イロヘ
地殿イロヘ上イロヘまイロヘのイロヘ元イロヘ服イロヘのイロヘ事イロヘ昔イロヘ時イロヘ其イロヘ例イロヘ稀イロヘ
地あイロヘるイロヘ故イロヘよイロヘ初イロヘ冠イロヘとイロヘらイロヘ申イロヘさイロヘとイロヘあイロヘやイロヘ然イロヘれイロヘ
地もイロヘ世イロヘのイロヘ中イロヘのイロヘ一イロヘ度イロヘのイロヘ榮イロヘえイロヘ一イロヘ度イロヘのイロヘ衰イロヘ

ある理の眞ありける身のゆくはむ
 ところ求むとて東の方へ行く雲の
 伊勢や尾張の海面は立つ波を見て
 いさゝか思ふ方の恋も
 羨しくも帰る浪にあたりち詠めゆ
 けぞ信濃ある淡向の嶽ありや
 煙の夕氣色

淡向の嶽は立つ煙 嶽は入の見
 やつとあめぬと口ぎさみ猶遠どの旅衣
 三河の國は著きかぶとて名もある
 橋の澤邊は白ふ杜若花此京のゆ
 かりありが妻あるやと思ひぞ出づる
 都人執るよ此物語其品多き事あ
 から取りあき此ハ橋や三河の水の底

地拍子
春やち
トモ

ひかく。契りし人の。數ふ。名をかへ
 品をかへて。人待つ。女物。病み。玉簾の
 光も。私れて。よ。帯の。雲の上。まで
 ぬべく。秋風。吹くと。假し。現れ。衆生
 齊度。の。われ。と。知る。や。否。や。世。の。人の
 闇き。は。行かぬ。有明。の。光。昔。き。目
 や。あらぬ。春。や。昔。の。春。ならぬ。我が。身

ろ。か。も。この。身。り。て。本。覺。真。如。の
 身。を。わけ。陰。陽。の。神。とい。も。れ。も。唯
 業。平。の。事。ぞ。か。あ。ら。う。よ。申。を。物。語
 疑。を。せ。給。よ。旅。人。還。ら。ぬ。時。ぬ。る。唐。衣。
 き。つ。や。舞。や。あ。ら。ん。花。前
 蝶。舞。ふ。給。た。る。ゆ。き。柳。よ。な
 鶯。飛。ぶ。片。た。る。金。植。点。置。き。し。

(長閑に引立て)
 (静に引締)
 (優に寛外)
 (拍子合)
 (拍子不合)
 地上
 地
 土
 七

二人静

解題

吉野勝手の社に正月七日若菜を摘みて神前に供ふる神事あり。此神事の菜摘女に静御前の亡靈憑き添ひて昔を語り又舞をまひたる事を作れり。亡魂の憑きたる女と目に見えざる亡魂と影の形に添ふ如く相舞ふ故に此名あり。着想類無し。後世の書には世阿彌の作とあれど、申樂談儀其他の古記に此事見えず。申樂談儀に静とのみ記せるは此曲にあらずして吉野静なるべし。寛正の紀河原の勸進能に音阿彌が演じ、永正の粟田口勸進能に御座敷よりの御所望によりて金春太夫が演じたり。其他親元日記にも文明十五年三月上演の事見ゆ。古くは二人閑と書きたり。

能之小書

立出一聲といふ小書あり。

謠ひ方梗概

三番目物の中にては位稍さなりとしたる方なり。静御前の靈、菜摘女に乗り移り、シテ二人にて能く一人の静を謠ひ表はさざるべからず。

シテ

前は執心を持ちて確りと優にあるべし。呼掛は遠き方より呼び掛くる心なれば、静に出で漸次大ききて地へ渡す。後は華麗を専として戀慕の心を含む。「菜摘の女と思ふなよ」は前の一聲の調子を承けて大きやかに、能にては謠ひながら出づるものなれば、引立て、はつきりとあるべし。「さても義經」云々の連吟よりサシの中音の調子にてさらりめに謠ひゆく。クセの上端は、初なるを稍確り、後なるをさらりと扱ふ。舞の前「賤や賤」は位静にして趣有るべく、舞済みて稍花やかに「賤や賤」云々と餘情あるやうに謠ひ、「思ひかへせば古へも」は氣を更へてゆるやかに乗るべし。

ツレ

初の程は賤しき菜摘女の心にて位を取らず、一聲、サシは長閑にさらりと扱ひ、シテ又はワキとの問答も常と異なる處なれど、「何真しからずとや」茲より静の靈の憑くものなれば、此一句は稍氣を掛けて其趣に謠ひ、以下一躍してシテの位となり、心持も調子も尋常ならぬやうにあるべし。「櫻は花に」云々はかゝつて出、底強みに確りと怨する體に扱ひ、「兼房は」以下クリの調子にて運びはサシの如くさらりとしたる

中にも確り、「眞はわれは云々はクドキの調子にてやうさらりと謠ふ。ワキとの問答は位を持ちながらさらりめに承け渡し、「袴は精好」の掛合、ワキよりも調子高に、「げに耻づかしや」は一息間をおきて晴れんと花やかなるべし。「一聲はたつぷりと大きく、シテ出でよよりは位を譲り、シテに従ひて謠全く一致するやうに力むべきものとす。

ワキ 常の僧ワキなどに比べては稍位をとりて穩健に扱ひ、問答は凡て角立たぬやう心附を要す。

地 「夕風迷ふ」云々は更へて靜に謠ふべし。後は「つゝましながら」を、前の調子よりも低めて張る。前一節はクドキの調子なればこゝにて更へて出でざれば高過ぎて閉苦しかるべきなり。「川淀近き」は矢張り一聲の調子にて朗かにつけ、「科ありけるかと」はさらりと受け、ゆるやかに止めてクセに移る。クセは通して稍確りと謠ふが宜し。先づ靜に出て初の上端より少しく位をすゝめ、次の上端よりは更にさらりと扱ふ。それのみならず「云々は心持を新にして出、「昔を今に」は前の氣を受けてつく。「思ひ返せば」以下寛りと乗りて趣有るやうに謠ひ納む。

注意すべき謠ひ方 二枚裏のツレの上歌の中、「春立つ」との「つ」の字は、普通はスクヒ落シに扱ふを例とする所なれども、こゝは中落シに扱ふ。

辭解 三吉野 吉野といふに同じ、「三」は發語にて意味なし。此名雄略天皇の御歌に起る、吉野は大和國吉野郡の山地。古來櫻花の名勝たり。此に天武天皇の隠れ給ひし故事は謠曲國栖に作られ其袖振山に天女の舞ひし故事は謠曲吉野天人を生み、義勝手の御前 勝手明神社、吉野八神の一に稱ある七曲坂の側にあり。俗説によれば靜の舞の裝束、義經の鎧など當社に在りしが正保の火災に焼失せりとす。東鑑文治元年十一月十七日の條に「豫州(義經)大和の國吉野山に籠るの由風聞の間、執行惡僧等を相催し、日來山林を索ぬと雖も、其實無きの處、今夜亥の刻、豫州の妾靜、當山藤尾坂より降りて藏王堂に到る。其禮尤も奇恠なり。衆徒之を見咎め、相具して執行の坊に向ひ、具さに仔細を問ふに、靜の云はく、吾は是九郎大夫判官(今伊豫守)の妾なり。大物の濱より豫州此山に來り、五箇日逗留の處、衆徒蜂起の由風聞あるに依り山伏の姿を假りて逐電し畢んぬ、時に數多の金銀類を吾に與へ、雜色男等を付け、京に送らんと欲す、而して

彼の男共財寶を取り深峰雪中に棄て置くの間、此の如く迷ひ來れりと(以上譯文)と見え、義經記には同じ事柄を詳に記し更に藏王權現にて靜が法樂の舞をなしたることを附加せり。此等の史實が靜の勝手の社前に舞ひしといふ口碑を **榮摘川** 榮摘の名は同郡國栖村の大字に残れり。こゝうく 急ぎ立つるの詞。 **見渡** せば 拾遺集に「見渡せば松の葉白き吉野山幾世積れる雪にかあるらん」 **み山には** 古今集に「み山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり」 **木の芽** 後撰集に「霞立つ木の芽春雨故郷の吉野の花も今や咲くらん」 **雪の下なる** 更科日記の歌「白山の雪の下なるさざれ石の中の思は消えんものは」を借るにや。 **今幾日ありて** 古今集に「春日野の飛ぶ火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてん」 **春立つ** 拾遺集に「春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん」 **一日經** 供養のため頓寫と稱し大勢集りかまへて 心に待ち設け用意して **夕風迷ふ** 云云音を受けて夕風とを憂き身にかけて、身の韻を受けて水莖といひ、書くといふ音を以て撰き消すと續けたり。あだ雲とは浮雲、水莖とは筆又は手跡。 **眞しからず** 眞らし **花をも雲と** 古今集序に「吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなん覺えける」とあるによるか。 **櫻は花に顯る、ものを** 詞花集に「深山木にその梢とも見えざりし櫻は花に顯はれにけり」

言語道斷 言語に説くべからざる意。璠經に「言語道斷、心行所滅」。 **判官殿** 義經を **衣川の御最期** 義經は陸奥に下りし後、郡高館にて自殺せり。高館を古く衣川の館といふ。 **十郎權の頭兼房は** 義經記に、衣川にて義經自刃の後、十郎權頭兼房が己も敵を小脇に抱へて猛火の中に飛び入りし事見ゆ。 **こゝにて捨てられ** 義經記の「靜吉野山に捨てらるゝ事」の章に「十六日山路に迷ひける心の中、つゝましし。耻か靜に申さん 心靜に言はんといひて 暗に靜の名を洩す。 **舞の上手** 義經記に

こゝかなしけれ」云々。 **つゝましし。耻か靜に申さん** 心靜に言はんといひて 暗に靜の名を洩す。 **舞の上手** 義經記に

の静の舞の事を記して「別して白拍子の上手にてありければ」云々。精好 精巧織の略。練糸を經とし生糸を緯とし、或は平絹などの糊を引かず水張にして干したる地を用ふ。今三吉野の 今見るといふ音を受けて三吉野と云ひ、新古今集の歌「吉野な

「鴨」を「香も」渡邊 今の大阪市天満 神崎 同國河邊郡。神崎川に臨みたる地。海路心に任せず 後河法皇、院宣を下して頼朝をして討たしめられしかば、義經は四國路に赴かんと船出したるも、大風に逢ひ意

出の時静と別れたるやう作れども、分け入り給ふ頃は春 義經が吉野山に入りしは義經記にも「文治實は静も從ひて船にありしなり。捨て春は花の名山と名を得たる吉野の山にぞ籠られける」とありて、實際は冬なれども、諸曲作者吉野を記して花に及ばざるを惜み、故意に春の事として作れりと見ゆ。處は三吉野の

「吉野山花の下臥し日敷 一榮一落 菅公の詩に「一清見原の天皇 天武天皇。天智天皇の御弟な經て句ぞ深き袖の春風」。

天皇に委ねんとし給ひしも固辭して吉野に隠れ、大友皇子に譲り給ひしが、後大友皇子兵 櫻木の宮 宮瀧を聚め吉野を襲ひ給ひしこと源平盛衰記、宇治拾遺などに見え亦諸曲國栖に作られたり。

五町ほど吉野へ歸る道に祠ありと諸曲 宮瀧 吉野川の急湍をなせる所。昔離宮ありけるを以拾葉抄に見えたり。喜佐谷村にあり。宮瀧の南一里、川上村字大瀧にあり。一名大瀧。これは「ニシコオノタキ」と讀むべきを「ニジコオ」と濁りて謠ひ慣はしたり。我こそ落ちゆけ 瀧の水の落つると義

波は歸るなり 業平の歌「いとどしく過ぎゆく方の戀しきに 頼む木蔭 吉野といふに南朝を思ひり落ち給ひし道に雨に逢ひ給ひし時藤原藤房がよめる「如何にせん頼む蔭とて立ち寄れば猶袖ぬらす松の下露」の詠を引きて頼む蔭と云ひ、又天皇の御製「あめが下にはかくれ家もなし」の詠によりて雨もたまらぬと續け

た。足びきの 山といふ語に冠する枕詞。唐土の祚國 祚國の事は古く廢されたる謠曲祚國より引けりと見ゆ。靈に逢ひし事を作る曲にて文も甚古雅なり。曲中に「花の色は霞をうがつて、跡をいづくとも無きかんろなり、しんか跡を埋んで花の暮を惜み、祚國正に身を捨て、月の春を待たずと云ふ、詩の心までも思ひ出でられ

て候」。又「此詩と申すは漢の代に祚國と申す者花山に入り、巖路の 遊子残月に行きしも 唐の賈けはしきを忘れ、此深谷の土となりしを、古人詩に作れり」云々。遊子 遊子猶行於殘月、函谷鷄鳴とあるを引く。遊子は旅人、殘月は有明月なり。花を踏んでは同じく惜む 和漢明詠集に出でたる白樂

月、踏花同惜少三吉野の奥深く 續後撰集に「いとぎ立てこゝは假 賤や賤 古今集及び伊勢物語に年春」を引く。寝の草枕猶奥深し三吉野の里。賤や賤 古今集及び伊勢物語に

り返し昔を今になすよしもがな」とある歌の第一句を歌ひ更へしなり。義經記に靜捕へられて鎌倉に送られ若宮八幡の社前にて舞を所望せられし時、頼朝の前なるをも憚らず此賤や賤の歌及び「吉野山峰の白雪踏み分け

て入りにし人のあとを戀しき」(これも古今集に出でた 思ひ返せば 緒環を繰り返すといふ縁にていひ、原るものは少しく辭異なり)の二首を歌ひしこと見ゆ。恨みの衣川 裏といふ音の縁にて衣川に續け、衣の縁にて身といひかく。

装束附

前シテ (静御前)

面深井若女小面の内、鬘、盤帯、襟白二つ、着附摺箔、唐織着流。

後シテ (静御前)

面同前、鬘、盤帯、前折烏帽子又は静烏帽子、襟白二つ、着附摺箔、色入縫箔腰卷、長絹、縫入腰帶、葛扇。

ツレ (菜摘女)

面連面、鬘、鬘帶、襟赤、着附摺箔、唐織着流、持物手籠に木の葉を入れる、物着後唐織脱ぎ長絹を着け後シテに同じくす、色入縫箔腰巻、縫入腰帶、葛扇。

ワキ (神官)

風折烏帽子、着附厚板、白大口、單狩衣又は長絹、腰帶、扇。

三番目

二人静

正月

ツレ
ワシ
キテ
静御前の靈
勝手神職

早稲 (穂健こ)

こゝろに三吉野勝手の吉前よ仕入申
まき者よさる。さくも當社のあき吉神
事様と吉座の中よも正月七日の菜
摘川より若菜や摘ませ。神前よ供
へ申い。今日よ相嘗りての程よ女どもよ
申しつけ。若菜摘川へ摘ませと存る。

疾(氣ヲ更ヘテ)うく女(確カシ)も葉(長閑ニ滞リナク)摘川へ出でよと
 申(ヨウク)見(抽子不念)渡せら。松の葉(サシ上)白(葉直ニササリ)ま吉
 野山(イニク)幾代(ヨ)積り。雪(サシ上)あらん。又山
 小松の雪(イニク)だよ消えあぐよ。都(イニク)の野邊
 の若菜(イニク)摘む頃(イニク)も今(イニク)やありぬらん。
 思(イニク)ひや(イニク)こそ(イニク)ゆ(イニク)あり(イニク)けれ(イニク)。本(イニク)の芽(イニク)
 春雨(イニク)降(イニク)の(イニク)とも(イニク)も(イニク)本(イニク)の芽(イニク)春雨(イニク)降(イニク)の(イニク)

小菘

ても猶消え難き此野邊の雪の下
 ある若菜やば今幾日ありて摘ま(イニク)し。
 春立つと。り(イニク)ぞあり(イニク)や(イニク)み(イニク)より(イニク)の山
 も霞(イニク)みて(イニク)白雪(イニク)の消え(イニク)跡(イニク)こそ(イニク)首(イニク)と
 あり消え(イニク)跡(イニク)こそ(イニク)首(イニク)とあり(イニク)の(イニク)

のうも(イニク)し(イニク)も(イニク)の(イニク)と(イニク)申(イニク)お(イニク)ぐ(イニク)れ(イニク)葉(イニク)の(イニク)と
 い(イニク)ち(イニク)あ(イニク)る(イニク)人(イニク)と(イニク)あ(イニク)り(イニク)て(イニク)ま(イニク)野(イニク)へ(イニク)帰(イニク)

りる言傳ロトツて申シふことシラリ何事ナニコトも

いぞシテ三吉野（静ニ聊カ物凄デシ）の社家シヤの入ツ其

外ソノの入ツも言傳ロトツて申シい餘ヒつよあら

むウ罪業サイゴの程ハ悲ヒしくシ一日イチニチ經書キョウキョ

り我ワが跡訪アトヲびたゞシ給ツくシわんシく

作シやシくシぬシるシの事コトをシ言フや

らシ言傳ロトツをシ申シかシぐシかシつシひシもシ名

誰シと申シふシまシ

ちシぶシ誰シの申シかシぐシかシんシまシまシぐシくシ此コノ由

作シやシらシいシまシもシ疑ウタガハシぶシ入ツあらシ其ノ時キ

あシらシちシおシいシもシ馬ウマをシかシへシ毒ドクくシ名ナちシぶ

名ナのシべシりシあシまシぐシいシまシぐシ屋ヤをシ給ツくシも

夕ユフ風カゼ迷マヨひシあシだシ雪ユキのシらシきシおシ若ワカのシ筆ヒトデのシ

跡アトちシおシ首ウデおシちシもシかシむシわシらシつシあシおシ消

まシやシらシもシかシむシわシらシつシあシおシ消

地下歌（カヘテ）
（拍子合）

中（カヘテ）
（拍子合）

（静ニ）

此の故に〜^{ツレ(サラリ)} かしらるるいさよ。彼れは静
 り此由ぞ申せざると思ひて。いさよ申す。^(氣ヲ更ヘテ)
 唯今歸して。羊^(角ニタヌヤウミ) 何ぞと聲く歸り
 なきぞ。^{ツレ(サラリ)} 不思議の事のさうと聲く
 歸して。羊^(健カミ) かしらるるいさよの事ぞと
 葉摘^{ツレ(サラリ)} 二のさかつかか。いさよのさかつかかへ
 女のまへさういさよ。餘の罪業の程悲

▲シテノ位ニナル

一いさよ。一日^{イチニチ} 経書^{キョウショ} して歸^{トハラ} 果^イ して終^ハ せ
 じ。いさよのいさよ。果^ツ 分^ク 社^{シャ} 家の^ノ 入^リ
 ち申せざるさういさよ。真^{マコト} 一いさよの
 程^ハ 申^ス せざるさういさよ。何^{ナニ} 真^{マコト} 一いさよ
 ぞ。^(優ニ絶ニナク) 何^{ナニ} 真^{マコト} 一いさよの
 ち申せざるさういさよ。真^{マコト} 一いさよの
 ち申せざるさういさよ。真^{マコト} 一いさよの
 ち申せざるさういさよ。真^{マコト} 一いさよの
 ち申せざるさういさよ。真^{マコト} 一いさよの

来ぬれが雲の身一櫻の花よ顯すも
（抱子不念） 甲子不念 甲子不念
のちあら怒めの色はやま 言語

道断不思議ある事のよもあのみ狂

氣とくさくさおらしくおまおの入の

馮をばくたなつたおまおのつ終入歸る

未とせのべー 懇よあびし美らさるべー （優） 何ちらお

み美らさるべか。判官殿よはく申や

者あり （落著テ確カリ） 判官殿のち内の入の多き

中よも。珠の衣ニの法最期まで子供

申したり。十郎権の頭 （クリ、調子ニタラフ） 兼房の判

官殿の法死骸心静よ取り納め腹

やりがよ飛んで入り。珠よ哀あり。忠

の者さるもさるも。あまものち

真らあひし女あり。おままでい法供

二八 静

四

●雑子切込

舞ツレセや序舞（引立テ、タツアリ）ひあるぞ。皆（一息オキテ暗クト）寄りて序
 質ツレセ入（一息オキテ暗クト）りげは恥（健カニサスリ）ありあから。
 昔（優ニスラリ）忘ぬ心（健カニサスリ）きて早（健カニサスリ）あつあつ
 思（引立テ、タツアリ）ひでの時（優ニスラリ）も来（健カニサスリ）よけり（健カニサスリ）静（優ニスラリ）の舞（優ニスラリ）
 今（引立テ、タツアリ）之吉野（引立テ、タツアリ）の川（引立テ、タツアリ）の名（引立テ、タツアリ）の（引立テ、タツアリ）
 女（引立テ、タツアリ）と思（引立テ、タツアリ）よあよ（引立テ、タツアリ）山陰（引立テ、タツアリ）の（引立テ、タツアリ）
 香（引立テ、タツアリ）もあつあつ（引立テ、タツアリ）き。袂（引立テ、タツアリ）あな（引立テ、タツアリ）さ（引立テ、タツアリ）ても（引立テ、タツアリ）

●仕舞

義（引立テ、タツアリ）経（引立テ、タツアリ）途（引立テ、タツアリ）徒（引立テ、タツアリ）は準（引立テ、タツアリ）せられ既（引立テ、タツアリ）に討（引立テ、タツアリ）手（引立テ、タツアリ）向（引立テ、タツアリ）ふ
 と聞（引立テ、タツアリ）えり（引立テ、タツアリ）か（引立テ、タツアリ）ら（引立テ、タツアリ）小（引立テ、タツアリ）船（引立テ、タツアリ）は取（引立テ、タツアリ）り乗（引立テ、タツアリ）り渡（引立テ、タツアリ）邊（引立テ、タツアリ）
 神（引立テ、タツアリ）崎（引立テ、タツアリ）より（引立テ、タツアリ）押（引立テ、タツアリ）し渡（引立テ、タツアリ）らんとせり（引立テ、タツアリ）は海（引立テ、タツアリ）路（引立テ、タツアリ）
 心（引立テ、タツアリ）よ任（引立テ、タツアリ）せま（引立テ、タツアリ）難（引立テ、タツアリ）風（引立テ、タツアリ）吹（引立テ、タツアリ）りて本（引立テ、タツアリ）の地（引立テ、タツアリ）よつ（引立テ、タツアリ）ま
 一（引立テ、タツアリ）事（引立テ、タツアリ）天命（引立テ、タツアリ）かと思（引立テ、タツアリ）へ（引立テ、タツアリ）科（引立テ、タツアリ）あり（引立テ、タツアリ）し（引立テ、タツアリ）も
 科（引立テ、タツアリ）あり（引立テ、タツアリ）けら（引立テ、タツアリ）か（引立テ、タツアリ）と身（引立テ、タツアリ）を怨（引立テ、タツアリ）む（引立テ、タツアリ）る（引立テ、タツアリ）さ（引立テ、タツアリ）あり（引立テ、タツアリ）あり（引立テ、タツアリ）
 程（引立テ、タツアリ）よ。次第（引立テ、タツアリ）次第（引立テ、タツアリ）よ道（引立テ、タツアリ）狭（引立テ、タツアリ）き。序（引立テ、タツアリ）身（引立テ、タツアリ）

とありて此山よ分け入り給ふ頃の春。
 處ハ三吉野の花よ宿あり下所も
 長閑ありる夜嵐よ寝もせぬ夢も
 花も散り直よ一葉一落まのあたり
 ありて又此山を落ちて行く
 昔清見原の天皇一太友の白鳥よ
 龍をりておのよ踏み迷ひ雪の

本陰を頼み給ひける櫻木の宮神の
 宮瀧西河の瀧あれこそし落ち行け
 落ちててもはら歸りありさるもても
 三吉野の頼む本陰の花の雪雨も
 たまらぬ奥山の音騒がき春の夜の
 月の朧まで猶足引の山深み分け
 迷ひ行く有様の唐土の祚國の花

二身を捨てて地(前ヨリ運)遊子残月ハは行き
 一も今身のよは白雪の花を踏ん下
 下り同く惜む少年の春の夜も下
 静をらて騷かむ吉野の山風上よ
 散る花までも春の聲やらんと下
 跡の女三吉野の奥深く急ぐ山路下
 かな打切その女あらば思ひあり下

地拍子
春の夜も

地拍子
春の夜も

頼朝よ君一出され静ハ舞のよ手
 ありさくさありさく心も解けぬ
 舞の袖返も返も怨めく昔恋上(明カニ引)
 一き時の和歌甲賤や賤乙賤や乙
 去ら賤の亭環縹り返乙昔を乙
 今よあまのりもあま思ひかへ乙
 せむ古へも思ひかへせむも乙

地拍手

拍子投注意

沈めぬハシリハ

拍子ヲ括ツル心

アルベシ

(合方カハル)

ツツ人 (ハツキリト)

地上 (前ヲ受ケテ送リナク)

恋くもあ。憂き事の今も恨の
 衣に身こそは。あ。名をばはめぬ
 武士の物ごとよ。浮世のあらび
 あいぞと思ふ。ありぞ山櫻雪よ。あま
 ちも。花の松風静が。跡をさひ終へ
 静が跡をさひ終へ

安達原

解題

拾遺和歌集及び大和物語に出でたる平兼盛の和歌を本として想を構へ、原歌に女をさして鬼と云へるを眞の鬼として扱ひ、那智の行者が安達原に行き暮れて鬼女の家を宿り、終に行徳を以て祈り伏せたることに作り成せり。安達原の鬼女の傳説の源は惟ふに此謠曲なるべし。竹田金春峯蓮が弟子に與へたる傳書、親元日記の寛正中上場の記事等、古くは各流とも安達原と稱したるものなれども、今は他流皆黒塚と稱せり。又能本作者註文には近江猿樂より來りたるものと云ひ、二百十番謠目録には禪竹作と明記したれども、古き記録に其作者に就きて記せるもの無し。

能之小書

白頭、黒頭、急進之出、長絲之傳、四種の小書あり。

謠ひ方便概

前半は初を健に、シテ出で、中入までは寂しく後半は鬼事の本旨を表して強く凄かるべし。

シテ

前は年長けたる女が荒野に侘び住みの身をかこつものなれば、力めて艶を消し、寂びて濕やかに扱ふ好まず。サシは聲を抑へてしつとりと扱ひ、くすみたる中にも何處となく味の有るやうなるが宜し。ワキとの掛合も前と同じ心持にて謠ふ。ワキとの問答は靜に、「げに愧づかしや」は氣を更へて稍さらりと謠ひ、「月もさし入る」と緩めて心持あるべし。「賤が續麻の」弦より節を大きくやかに、位す、む心なり。ロンギは矢張り寂しかるべく、調子の浮かぬやう心して承け渡し、「月によるをや」と月に心を附くる趣にて謠ひ出し、「待ちぬらん」と稍運ぶ。次のワキへの詞、初の程は何事なきやうにして、「さらば頓て歸り候べし」と少しく間をおき、「や」と抑へて稍大きく、「いかに申候」より前とは聲調を更へて心に凄みを有つ。以下「御覽じ候な」といふ詞三所あり、初なるは確りと重々しかるべく、次なるは念を押す心、最後なるはワキツレにいふのなれば稍輕やかに、それ／＼更へて扱ふが宜し。此中入前は特に心持に意を留めて言外の氣色を漂はしむべし。後は鬼女の本體を得て、出より地との掛合へかけ凄みに手強く扱ひ、「今まではさしもげに」にて氣を抜き、稍ゆるめて謠ふ。

ワキ

山伏なれば總して弛みなく健に謠ふべし、上歌は少しく大きやかなるが宜し。出の返しはワキツレにのみ謠はするもよし。「いかにや主」以下さらりとあるべし。シテ中入濟み「ふしきや主の」云々は少しく間をおきて、確りとしたる味にてさらりと扱ひ、「心も惑ひ」の上歌は出を前よりも緩め、返シより勢好くさらりと謠ふ。イノリは凡て確りとあるべきものとす。ワキツレはワキを助けてうたひ、獨り謠ふ處はワキよりもさらりと、高めなるべし。

地

「さらば留り給へ」とは更へて静につけ、「異草も」より別になりて暢び、と謠ふ。次篇はゆるやかに世を渡る「云々はシテの氣を承けてさらりめに出づ。クセまで變らず。クセは無常の心にて寂しく、淀むが如くに謠ふべし。斯く上端の無きクセを片クセといふ。ロンギは其文句よりしても前とは全然離るべきなれど、派手に流れぬやう、稍しつとりと地味に謠ひて而も乗る心あるを宜しとす。能にては「長き命の」云々よりシテは糸を稍早めて繰るものなれば、謠も少しくすゝみ行き、「音をのみ」以下鎮めて止む。後は剛健に運びよく出、「見我身者」よりは調子好く乗る。「今までは」の返しは聊かゆるめてつけ、順次運びをすゝめて謠ふべきも、妄りに走るは宜しからず、十分力を以て謠ふべし。

辭解

篠懸の

山伏の着る麻の上衣。始は山路の露を防ぐに用ひしが後威儀を保つに着する例となりしもの。

那智の東光坊

那智は紀州東牟婁郡にあり。熊野坐

神社三所の一。東光坊は其社僧の坊名なり。

阿闍梨

弟子僧侶の學解、行儀を糾正指導する師範職。こゝ、祐慶は謠曲作者の假託。

捨身

佛法の爲に身命を捨つるも惜まざるこ

と。抖擻 頭陀の譯語。衣食住の

山伏

修行の行者。修行

熊野の順禮廻國

往古は熊野山

伏六十餘州を廻り法華經を一所づ、納めたり。これ佛道修業の爲なる故に釋門の習といへり。釋門は釋尊の門葉の意。即佛弟子を指す。

紀の路瀉

廣く紀州の濱邊。鹽崎の浦

紀伊南牟婁郡串本の南岬。潮の縁にてさしと續く。

錦の濱

鹽崎の磯濱にあり。二色浦とも云ふ。しをり行く 旅衣の萎れま

るべに茶をなしつゝ、行くとを兼ねぬ。次に日も(紐に通ず)と云ひ重なるといふは共に衣の縁語にてをりくつと續く。

陸奥の安達原 岩代國安達郡安達太良山(古く安達山)の裾野、方三里ばかりの地。今太平村

に黒塚の古跡と稱するもの遺れるは謠曲以後に後人の云ひ傳へしものなり。

笑止

思に添はざる時發する詞。

佗人 世を佗しく思ひなせる人。かゝる浮世に如く

物憂き世の中に。

秋のきて

新古今集に「秋來れば朝の風の手を寒み」云々とあるを借り、憂き世の中に飽きたる意にて續けたり。朝は朝の明け方。

昨日も空

く 大原御幸の謠に「昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす」と云ふ詞あり。まごろむ 云まごろむはトもやみなば如何せん寢ざめぞあらぬ命なりける」などより出るか。定なの生涯 豫測し難き一生涯。月影たまた

らぬ 「たまたらぬ」といふ詞訝し。或は松風吹きあれて陰となる爲月影さへ暫くも止まらぬ意にて、「月影とまらぬ」の誤には非るか。然りとせば次の句との續きもよし。旅寢の草枕 旅

行き暮れて山野に寝ること草枕とする意。假寢 かりそめに寝ること。草枕 枕をさす(閉)といふ音をうけて續けたり。強ひて 樞 戸

の戸 柴などにて組みし粗末なる戸。さすが思へば 戸をさす(閉)といふ音をうけて續けたり。強ひて 樞 戸 異

草もまじる茅筵 雜草をも織り交へた粗末なる茅の筵。うたて 満足に思ひ難き心。強ひても 押しても意。敷き 狩衣

宿を借ると云ひかけ、次 せはしなき 俚俗に忙しきを云ふ詞なり。誤りて混入せられしなるべし。原作句を呼び起す聯鎖とす。梓枳輪 糸を繰る。營む業 仕事。夜もすがら 終いつ

りどせば、こゝは心落ちつかぬ意に用ひし。梓枳輪 糸を繰る。營む業 仕事。夜もすがら 終いつなるべきも恐らく後世の誤傳なるべし。眞緒の糸 赤色の糸。こゝは散木集に薄を題にて「花薄眞緒の

まこなき 時に係らぬこと。こゝにては旅 眞緒の糸 糸を繰りかけて絶えずも人をまねきつるかな」などある例に慣ひ、糸を云はんとて續けた

昔を今になさばや 伊勢物語の歌に「古へのしづの緒環繰りかへし昔を今になすよしもがな」を借る。

績芋

細くつむぎたる麻糸。捻りか

世渡る業

渡世の業。夜に韻を重ぬ。

人界人間

生命

生身佛身

こゝに生れ

ながらの身と、成心だに

云菅公の詠と傳ふる歌。下の句「祈らすとも神や守らん」。

佛果の縁

佛となるべき證果を得る因縁。

地水火風

佛教にてこの四は萬物に周遍して至らざる無きものなれば四大或は四大種といへり。されどもこれも亦因縁所成の法なれば遂に空滅に歸すべきを以て「四大歸空」、「四大本來空」などいへり。此故に以下假に暫く纏はると續けた

生死に輪廻

生死の迷界に展轉循環するを云ふ。

五道六道

五道とは天上、人間、畜生、餓鬼、地獄、の五。六道とは之に修羅道を加へたるもの。此等は一切有情の業因に依て移り赴く世界なりとせらる。

あだなる事

無常にして空虛なること。

人更に若きことなし

人は何時までも幼時なる能はず忽にして

老衰すべし

和漢朗詠集に「人無更少時須惜年不常春酒莫空」。

あだなる心

空虛にして移り易き心

さしてそも

語を轉じて以下糸の談に入る。

あたりにて

源氏物語に光源氏、五條あたりにて夕顔の宿を訪はれしことあれば日蔭を云はんとて出せり。

日蔭の糸の冠

新嘗祭、大嘗祭の神事用ひしものにて

笄の左右に日蔭の蔓を象りて白青の糸を掛けし冠。源氏物語には此冠の事無けれども冠を美しく言はんとて用ひたりと見ゆ。日蔭の語は夕方の陰らふ音にも通ずれば前に夕顔の宿とある縁にてかく續けたるなり。それ

れは名高き人

源氏の君を指す。

賀茂の御あれ

京都賀茂の社の葵の祭。みあれとは神の生れ給ひし日の謂。

糸毛の車

牛車の一

車の屋に垂れて飾りしものにて高貴の人の乗りし車。賀茂の祭には高貴の人車をやりつゞけて見物せしこと古の習なり。糸づくしの二。糸櫻

糸櫻

しだれ櫻。糸づくしの三。糸を繰るといふ音を借りて來る人

穂に出づる

穂の秀で、目立程になること。

糸薄

薄の葉莖共に細きもの糸づくしの四

月によるをや

月の爲に夜を待つなるべしとな

糸の縁語

様々の糸の事を云ひて、此に目前己の繰る糸に詞を返す。

長き命のつれなさ

糸の縁にて綴る。命の長きを却つて物憂

く思ふ心

思ひ明石の

新古今集に「つくづくと思ひ明石の浦千鳥」云々とあるを借りて次句を起す。

音をのみ

鳥などの聲たて、鳴くこと音を鳴くと云ふ

により、千鳥を受けてしか云ひ、己の終夜唯一人して泣き明かすことに通はしたり。

かまへて

必

膿血

佛教にて人の死屍に九重の觀相ありと説ける中の膿爛相と血塗相との解け合

ひ亂れ合ひたるかたち。膿爛は膿爛腐敗するを云ひ血塗は血肉の地に塗るを云ふ。

臭穢

惡臭とけがれと。

膨脹

九相の中、脹相の謂。死屍の膨脹するを云ふ。これを「ホーチャク」と謔ふは假名

書の「う」を「く」に讀み誤りし後世の誤音なり。

膚膩

皮膚と脂肪肉と。

爛壞

壞れたることを。九相の中の膿爛相、壞相の語を以て綴る。

安達原の黒塚

云拾遺集に「みちの國名取の郡黒塚といふ所に重之が妹あまたありと聞きて遣はしける」と詞書して平兼盛の歌に「陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりといふはまことか」とあり。同じこと大和物語にも少し更へて出でたり。此歌は女を鬼と呼びたるにて、似たる例は伊勢物語に「かりにも鬼のすだくなりけり」と云ひたるなどもあるを、此謔には眞の鬼として作りしなり。

憂き目を陸奥

憂き目を

見ると言ひかけて前

あさま

明らか

胸を焦す焰

激越なる心の亂れを焰に喩ふ。

咸陽宮の煙紛々

咸陽宮は秦の始皇帝の

宮殿。項羽に焼かれて燃ゆること三月なりしといへば焰の激しき譬に引く。和漢朗詠集に「咸陽宮之煙片々」の句あるを用ひたるなるべく、今「紛々」と謔へるは古く「片々」と謔ひしを語氣を強めんとして改めたるなるべし。

鳴神

稻妻

鬼一口

伊勢物語に雨降り雷なる夜、業平が密に連れ出したる女を奪ひ返されし事を記して「鬼はや女をば一口に喰ひてけり」と記せる詞を借る。

鐵杖

地獄にて罪人を苛責するに用ふる鐵の杖。

東方に降三世明王

以下密教の五大尊に惡魔降伏を祈る詞。呪文の始に置く詞。歸命、供養、攝伏等の義。阿彌陀佛に

南無の字を冠す

呼嚕呼嚕

薬師に祈る呪。薬師如来觀行儀軌法に「呼嚕呼嚕々々、戰戰利、摩橙祇、莎河」。

阿毘羅吽欠

大日如来に祈る呪。大日經疏に「此五字

即是降四魔

娑婆呵

呪文の結句にて究竟、驚覺等の義。

吽

一切の教義を含有する摧破の聲。

多羅吒干輪

不動の慈救の呪。

見我身者

見我身者

見我身者

見我身者

見我身者

見我身者

見我身者

發菩提心

我身を見るものは菩提心を發し、我名を聞く者は惡を斷ち善を修し、我説くを聽くものは大知慧を得、我身を知る者は即身成佛せんといふ不動明王の誓約。即身成佛の肉身のまゝに成佛すること。明王の繫縛に業毒を斷ち大往生を得しむといふにより此語を用ふ。つゝめ縮

裝束附

前シテ (老嫗)

面深井、長鬘鬘髻つき、無色鬘帶、襟淺黃、着附無地熨斗目、無色唐織着流。

後シテ (鬼女)

面般若、無色鱗鬘帶、着附無地熨斗目、紋盡腰卷、縫紋腰帶、修羅扇、紺地打杖、負柴に唐織卷きつけ肩上げる。

ワキ (東光坊祐慶)

兜巾、篠懸、着附厚板、白大口、水衣、腰帶、小刀、扇、刺高珠數。

ワキツレ (同行山伏)

兜巾、篠懸、着附無地熨斗目、白大口、縷水衣、腰帶、小刀、扇、刺高珠數。

五番目

安達原

八月

ワシテ 鬼女(前、嫗)
ツレ 東光坊祐慶
同行山伏

四拜次第上(健カニ他ニナク) 旅の衣ハ篠懸の旅の衣ハ篠懸の
露けき袖やーちるらん (柏子舎)
那智の東光坊の阿闍梨祐慶と
我が事あり 早サ上(確カニト) 捨身持擲の行
體ハ山伏修行の便あり 熊野の
順禮廻國ハ皆釋白のあらひあり

安達原

安達原 (素直ニスラリ)

然るよ 祐慶此向にまきつる願ありて
廻國行脚に赴かんと 我が本山を
まき出でて 我が本山をまき出でて 分け
行く末の紀の路 鴻塩崎の浦をさし
過ぎて 錦の濱のちりく 猶志をり
行く旅衣日も重あはれ程もあく名よ
の女聞き 陸奥の安達原よ著

安達原 (健カニ確カリ)

原よ著あはれ あり笑止や日の暮れ
ある此あたりに入里も無いらあてよ

火の光の見入る程よ まち葉の宿を
借らやと存い 借人の習はよ
悲しきものなりありあはれ

安達原

秋の来て。朝ササエけの風ハ身ニまゐるも。
胸ヲ休ムむ事モあらく。昨日キノも空ヲく
暮ノぬらぬらまらむらむらむら命イハある。
あらきオのハ涯ガ也ナ 早ハヤ行ヨク（確カリ） 早ハヤ行ヨク（確カリ）

の内ノ案ノ内ノ申シ （健カニサラリ） （健カニサラリ） （健カニサラリ） （健カニサラリ）
いいやや耳ミ給シ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
奥ノ安ラ達ガ原ノ行キ暮レて宿ヲ

借カぐま便トもあら願ヒてらあらを
憐レみて一ト夜ノ宿ヲ賃シ給シ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
遠キ此ノ野ノ邊ノ松ノ風ノ烈ク （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
れて月ノ影ヲたまらぬ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
でら留メ申シ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
草ノ枕ノ今ノ宵ノ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）
たら宿ヲ賃シ給シ （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク） （早ハヤ行ヨク）

旅人の見の目も恥ぢざらん。今宵留る此
 業こそもの憂けれ。宿の至の情深き夜の目もさへ
 圍の内よ。真赭の糸を繰り返す。真赭の糸を繰り返す。
 真赭の糸を繰り返す。昔や今よあき
 だも。賤が績麻の夜までも世渡り
 業こそ物憂けれ。あはまのや。界

小謡

よ生を受けあがら。あはまの憂をせらよ
 明け暮ら。身や苦むる悲一かよ
 はあまの人の言の葉や。まづ生身や
 助けてこそ。佛身を願ふ便もあれ
 からの憂をせらよ。あがら。あはまの憂をせらよ
 あまの身ありとも。ただよ誠の道よ通
 ひあま。祈らざらん。終よあま。佛果の

小謡

五

縁（シタレ）とあらざらん（種子念）唯（静寂シク）これ地水火風
 の假（中）も暫らくも纏（中）をりて生（オキ）死（シ）の輪（中）廻（下）
 一五道六道（中）も廻（中）の事唯（中）一心（中）の迷（中）
 あり（中）。およそ人（中）間のあだある事や案（中）
 ぎるよ入（中）更（中）の苦（中）ちひ（中）あ（中）終（中）り（中）
 老（中）あ（中）の（中）もの（中）ち（中）あ（中）ほ（中）と（中）は（中）あ（中）ま（中）い（中）夢（中）の
 せ（中）ち（中）あ（中）ん（中）や（中）厭（中）さ（中）る（中）あ（中）ら（中）あ（中）ら（中）あ（中）だ（中）

地拍子
 念みてもわひ
 ちりけいも

●独吟

ある（地味ニシタリヤ）こと（中）を（中）怨（中）み（中）て（中）も（中）あ（中）ら（中）あ（中）ら（中）け（中）い（中）
 さ（中）て（中）そ（中）も（中）五（中）條（中）あ（中）だ（中）り（中）ま（中）て（中）顔（中）の（中）宿（中）
 ち（中）尋（中）ね（中）し（中）日（中）蔭（中）の（中）糸（中）の（中）冠（中）著（中）し（中）。
 そ（中）の（中）名（中）高（中）き（中）入（中）や（中）ら（中）ん（中）賀（中）茂（中）の（中）ち（中）
 あ（中）れ（中）の（中）飾（中）り（中）糸（中）毛（中）の（中）車（中）と（中）こ（中）そ（中）
（花ヤカニナラズ）糸（中）櫻（中）色（中）も（中）盛（中）よ（中）咲（中）く（中）頃（中）ハ
（天カニ）多（中）き（中）春（中）の（中）暮（中）穂（中）よ（中）出（中）づ（中）る（中）秋（中）

心安く思へぬてさく （静ニ） ぬら嬉
ーやば。 （確カリ） 入て法醫入ていあ。此方の （重クシク）
空僧も法醫入ていあ。心得申い。 （カロク） 早 （ケシ運ビメニ）
羊カ （拍子不合） 不思議やまの国の内を物の隙より
よく見ぬ。膿血忽ち融滌。臭穢ハ
満ちて膨脹。膚臍悉く爛壞
せり。人の死骸ハ數知らざる。軒と等す。

く積み置きたり。いゝまゝいゝ音よ
洵く。安達が原の黒塚。籠れぬ鬼の
まみらあり。 （早ツ上） 怒りやあら真愛ま
目や陸奥の安達が原の黒塚。鬼
籠れりと詠どけん。歌の心もおくや
らん。 （三ノ） 心も惑ひ肝を消し。心も
惑ひ肝を消し。行くまの方知らね

とも。只よ任せて逃げて行く足よ任せ
て逃げて行く(始子不合)後三王(剛健ニ堂々ト)いうもある客僧
止れとて。さーも隠し。園の内を。

あきまよのあきらみ来りせし。恨申しよ
来りたり。胸を焦も。焰威陽宮の煙。
給たり。野風山風吹き落ちて
鳴神稻妻天地に満ちて。空あき

曇る雨の夜の鬼一口は喰ちて
歩み寄る足音。振りよがる鐵杖
の勢。あたりを拂つて怒りや
東方よ降せ也。明王。南方よ軍荼
利夜又明王。西方よ大威徳明王
北方よ金剛夜又明王。中央よ大日
大聖不動明王。唵呼嚕呼嚕旋

地拍子
明王の
カチ
響子
間
ミ

荼利摩登枳庵阿毘羅維半次安
婆呵咩多羅吒干輪(拍子)見我身者
發菩提心見我身者發菩提心聞
我名者斷惡修善聽我說者得大
智慧知我心者即身成佛即身成
佛と明王の敷系練のかけてせめかけ
責めかけ新の伏せよけつたて懲つよ

中(氣ヲ抜キチヤ、緩マ)

地中(聊カユルヲ順次ニ進ミ)

地拍子
カチ
響子
間
ミ

地拍子
カチ
響子
間
ミ

今までいかにもげよ
しもげよ怒をあつる鬼女あつる
忽ちよ弱り果てて天地よ身をつめ
眼くらみて足ももつらよろくも
よひめぐる安達摩原の黒塚よ隠れ
ほぐもあつるあつるめ淡まや
愧の我が安やと云ひ響子猶物

PLI and

儻々く。そよ聲。猶儻々。き夜あり。
の音よ。まじりまじり。失せよけり。夜嵐の
音よ失せよけり。

大正十三年九月十五日印刷
大正十三年九月二十二日發行

觀世流改訂謄本
大正十三年版



訂正者 丸岡

發行者 土居源太郎

印刷者 鈴木彌作

東京市神田區東松町十二番地

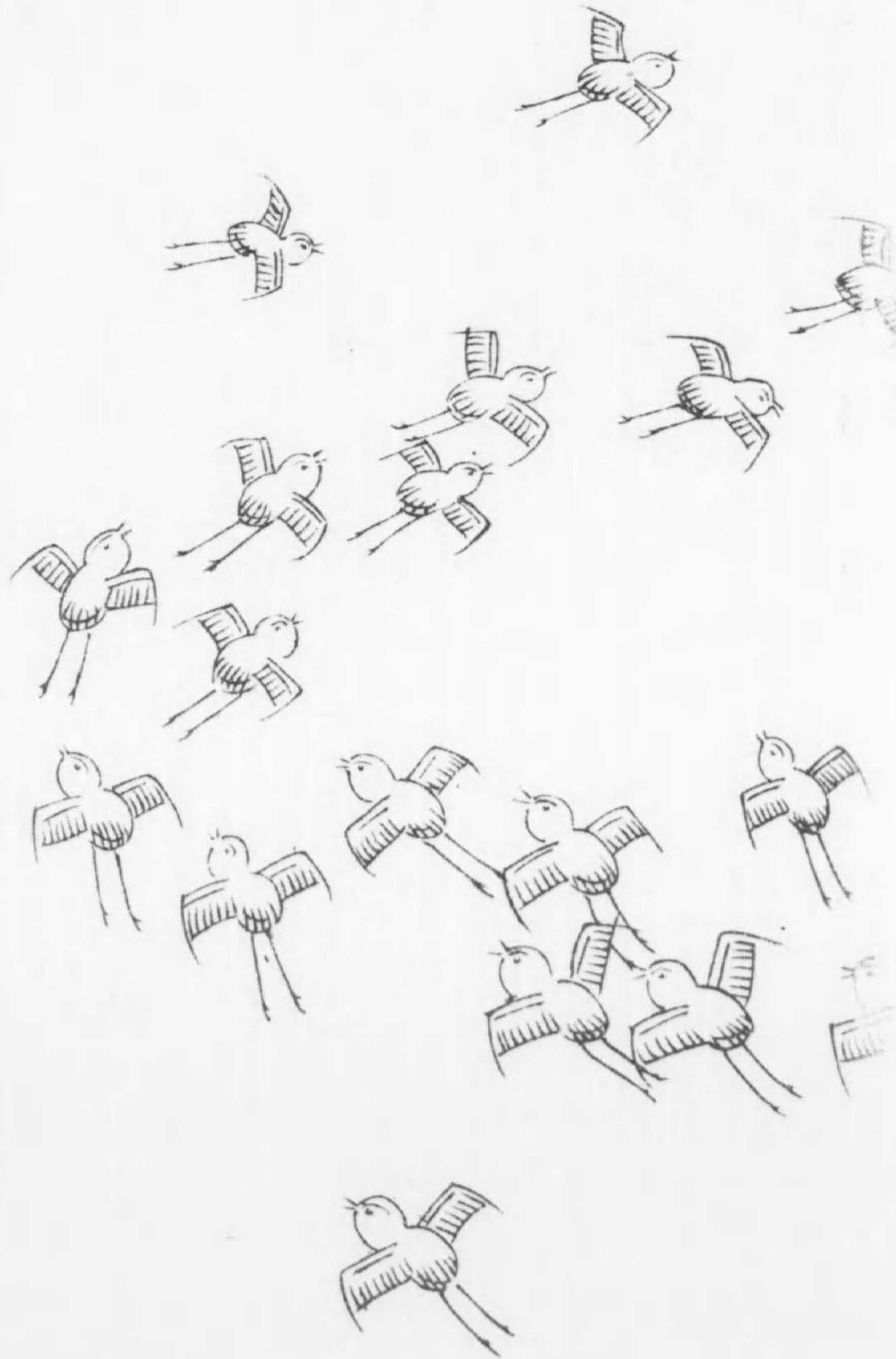
印刷所 信英堂印刷所

東京市神田區今小路三丁目九番地

發行所 觀世流改訂本刊行會

電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

284
2



終